# 天理市埋蔵文化財調査概報

平成6・7年度（1994・1995年）

1998

天理市教育委員会

別所ツルベ遺跡　硬玉製大珠

# 例　言

1．　本概報は、天理市教育委員会が平成6年度および7年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。本概報には目次に示した遺跡についての調査の概要を収録している。

2．　調査については、社会教育課文化財係の泉　武、松本洋明、青木勘時が分担した。それぞれの調査担当者は目次に明記した通りである。また、現地調査、遺物整理から本書の作成に至るまでに下記の整理補助員、学生諸氏の御助力を得た。記して謝意を表する。

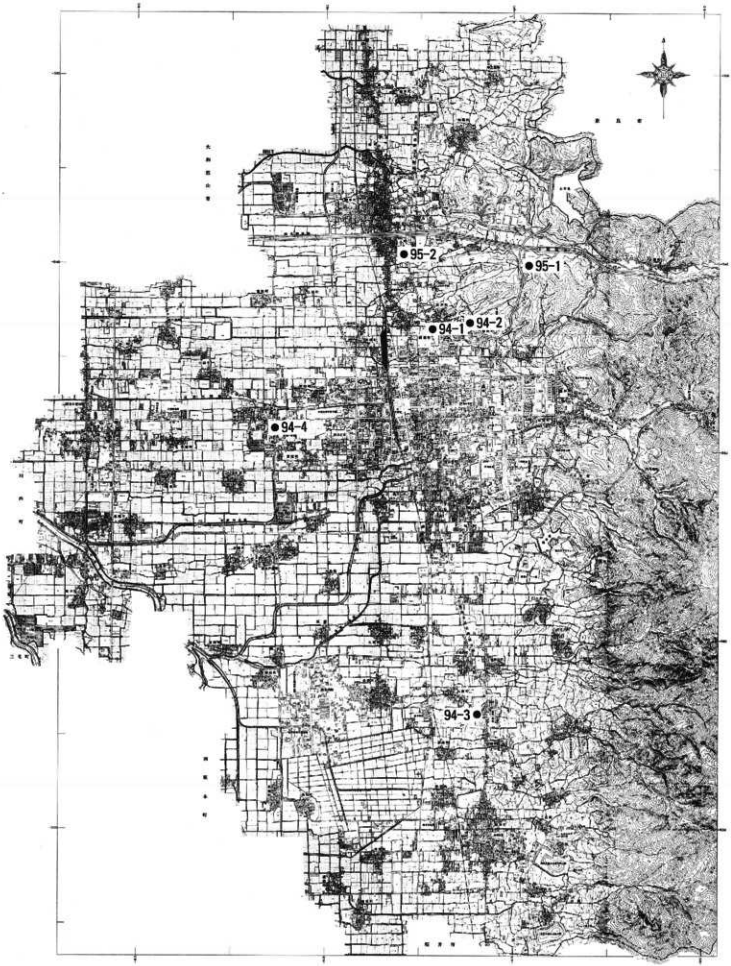
芳村信芳　中森軍之介　中森冨美代　河喜多淑子　山田光子
西山陽子（堺女子短期大学卒業生）　大嶋和則（奈良大学・現香川県高松市教育委員会）　和田和哉（奈良大学・現長野県山形村教育委員会）　市村慎太郎（奈良大学・現㈶大阪府文化財調査研究センター）　田坂佳子（天理大学・現岡山県古代吉備文化財センター）　田中涼子（天理大学・現高知県文化財団埋蔵文化財センター）　木下満代（天理大学・元兵庫県津名郡町村会）　清岡廣子（天理大学・現明日香村教育委員会）　中山玉生（京都橘女子大学・現京都教育大学大学院）　吉田和彦（奈良大学大学院・現別府大学博物館）　加藤一郎（早稲田大学）　八重樫由美子・杉岡英治（天理大学）　山川俊一郎（奈良教育大学）　鹿野墨・岡根稔・松本寿子（奈良大学）

3．　本概報の執筆は、それぞれの調査担当者および参加者が分担し、文末にその文責を明記した。なお、編集は青木がおこなった。

# 目　次

平成6年度（1994）
1．別所ツルベ遺跡……（青木）　1
2．宮西遺跡……（泉）　61
3．馬口山古墳……（泉）　65
4．前栽遺跡……（松本）　69

平成7年度（1995）
1．平尾山1号墳……（泉）　75
2．在原遺跡（第5次）……（青木）　79




平成６・７年度　遺跡調査地点

# 平成 6 年度

(1994)

# 1．別所ツルベ遺跡－別所町

## Ⅰ　位置と環境

### 1．遺跡の立地環境

別所ツルベ遺跡は、天理市北部の別所町に所在する縄文後期を中心として弥生以降にも断続的な営みが確認される複合遺跡である。地理的には、天理市街地北方の豊田山より南西に向かって延びた丘陵が沖積平野部へと埋没する標高70m前後の緩斜面上に当遺跡は立地している。今回の調査地近辺の地形的条件からは、北東側にある豊田山丘陵の末端尾根筋と南側の南西に拡がる微高地に挟まれて浅く窪んだ扇状低地部を中心に遺跡の展開が考えられる。おそらく、こうした地理的条件の推移に起因して時期が下るにつれて低地部の埋没が進み西方の平野部へと集落の中核が変動していったものと思われる。

### 2．周辺の遺跡

当遺跡の周辺では、北から北東にかけての豊田山丘陵の上部あるいはその近辺に集落遺跡や古墳の存在が知られている。集落遺跡では、平地との比高差約30～40mの低丘陵上に立地する別所裏山遺跡やその東側に近接した豊田山遺跡があり、ともに弥生後期から古墳前期初頭頃の帰属時期が確認されている。丘陵端の辺りには別所大塚古墳、別所袋塚古墳、塚山古墳、別所カンス塚古墳等の後期古墳の分布が知られる。北方には古墳後期から奈良・平安期の遺構、遺物が出土す

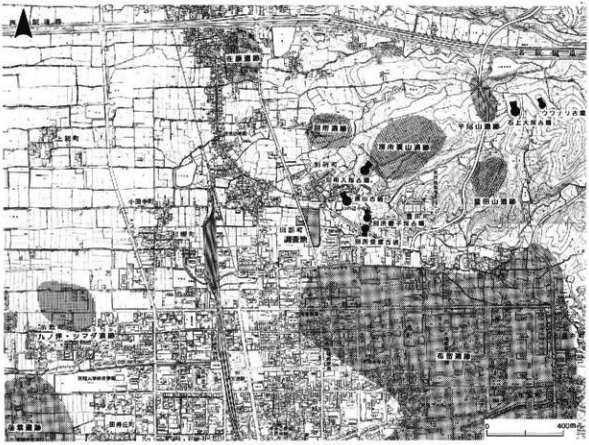



図1　調査区および周辺の遺跡（S＝1／20000）

る別所遺跡が天理市立天理北中学校を中心とする範囲に所在する。また、当遺跡の西方では田部町一帯に遺物散布が認められるが調査例が無いため実態は明らかではない。南東方向には天理市街の東を広範囲なまとまりで各時期にわたる遺構、遺物の検出される布留遺跡が所在する。

次に、当遺跡と同時期の縄文後期、弥生中期の土器類が近在する布留遺跡豊田（三反田）地区においても谷地形の低地に流れる旧河道堆積層の砂礫土中より出土している。南方の布留遺跡三島（木寺）地区では縄文晩期前半の滋賀里Ⅰ～Ⅲ式に帰属する土器群や土坑、貯蔵穴等の遺構が検出されており、縄文集落の平野部への移動を示しているように思われる。

## Ⅱ　調査の契機と経過

### 1．調査の契機

別所ツルベ遺跡は、天理市別所町字ツルベ・袴田において計画された大規模小売店舗（オークワ天理北店）建設に伴う事前の試掘調査によって新たに確認された遺跡である。建設予定地の敷地面積が約10000m²におよぶ広大な面積であったことから、遺跡の有無確認を目的とした試掘調査の結果、敷地北半部に縄文後期の良好な遺物包含層の存在が認められたため建物部分を中心に面的な発掘調査（第１次調査）を実施することになった。なお、包含層分布範囲の小字名から遺跡の名称を別所ツルベ遺跡と命名した。また、その後も同じ敷地内での店舗建設に伴う小面積の調査（第２次調査）や道路を挟んで西側に計画された同店舗駐車場予定地の確認調査（第３次調査）を実施している。

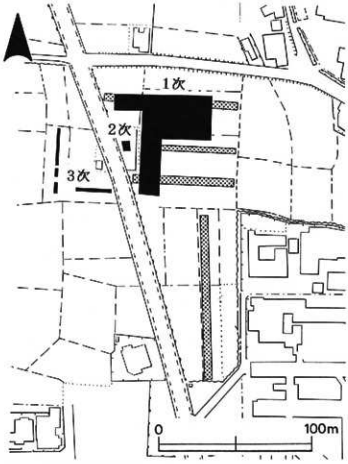


図２　調査区位置図(S＝1／2500)　※アミ目は試掘トレンチ

### 2．調査の方法と経過

本調査については、試掘調査の成果に基づき縄文後期の良好な包含層の分布範囲である敷地北半の店舗建設予定地を内包する南北30m、東西42mの長方形の中央調査区を設定して、この側縁に西方に連続する幅10m、長さ18mの西調査区と東側縁に沿って南方に延長した幅12m、長さ37mの南調査区を付随させたかたちで想定される遺構、遺物の存在領域を覆うように設定し調査を進めた。

発掘作業にあたっては耕作土、床土と上部包含層の上面を削り込むように現地表下0.5mまでを重機で除去し、以下を人力掘削とベルトコン

ベア使用の排土により調査を進めた。

調査区の地区割りは全調査区をほぼ正方位に５ｍグリッドを基準とした区画を任意に設定して使用した。各小区の地区名は、調査区の北西角より東西に1～12、南北をA～Nとしてそれらの組み合わせにより表示し、遺物出土地点の客観的な把握に利用できるよう務めた。

調査は、平成６年１月16日から19日にかけておこなった試掘調査の結果を踏まえ同年３月28日より本調査（第１次調査）に着手し同年５月26日にすべての現地における作業を完了した。総調査面積は約2000㎡であった。

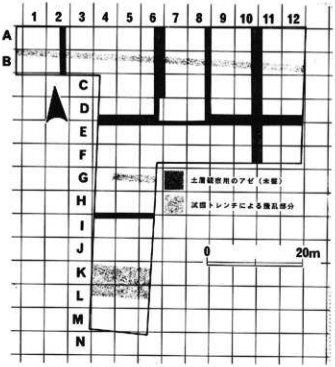



図３　調査区地区割り図（S＝1／1800）

なお、その後も店舗建設に伴う小規模な調査（第２次調査）を平成７年１月９～18日に、駐車場予定地の確認調査を同年３月７日に実施しているが、本報告においては第1次調査の成果を重点的に扱い、その後の調査成果については報文中で触れるのみに留めておきたい。

## Ⅲ　層序と検出遺構

### １．各調査区・地点の層序

当遺跡については前章で述べたように新規に確認された遺跡であるため試掘調査時の層序確認では遺物包含層の分布に注意を払う必要があった。試掘トレンチは調査地の北半に東西方向に３箇所、南半に南北に長く１箇所をそれぞれ設定して進めた。北より第１～第４トレンチとして調査を実施した結果、第１・第２トレンチにおいて多くの縄文遺物を含む層厚40～50cmの遺物包含層を確認することができた。しかし、南側の第３トレンチでは地山と認定し得る土層の検出面の標高値は北側トレンチに比べて高く、遺物包含層の厚さや遺物内容についても中世前半期の遺物が散漫な状況で見られ縄文、弥生期の土器片が混在する15～20cm程度のものであった。基盤層では北側トレンチでは砂・シルトあるいは砂礫土であるのに対して第３トレンチにおいては下位では砂礫土となる砂混じりの堅く締まった粘質土となっていた。ここで地形的条件の違いによる遺物包含層の時期差が明らかとなったが、さらに南側の第４トレンチでは耕作土・床土の直下で砂礫の堆積が厚く認められ遺物は稀にしか見ることができなかった。こうした堆積状況は東南に近い布留遺跡豊田（三反田）地区調査地点の状況に極めて類似し、第４トレンチの辺りはその下流域として連続した位置関係にあったと言えよう。そして、第３トレンチ周辺は微高地の様相を呈しており、先述の旧河道右岸とも考えられる。以上のように、遺跡の中心は第１・第２トレンチ

の間の浅い谷地形周辺にあることが予測されたため本調査区を限定することができたのである。

次に第１次調査区の層序を中心に概観し、その後の第２・３次調査の層序と併せたうえで当遺跡内の旧地形復元についてもまとめておきたい。

ここでは、第１次調査地の地形を反映する浅い谷地形を縦断する中央調査区の東西アゼ（Dライン）とこれに直交して谷地形を横断し南調査区東壁と連続する土層断面（６ライン）および平行する位置にある南北アゼ（10ライン）の層序の対比から当遺跡の層序について概観する。

第Ⅰ層（耕作土）、第Ⅱ層（床土）はともに調査区の全域に層厚0.4～0.5mで均等に拡がりを見ることができる。第Ⅲ層は、黒褐色砂混じり粘質土あるいは砂質土である。層厚0.2m前後で遺存し、縄文後期～古墳後期の時期幅の遺物包含層である。上面で平安期以降の井戸、土坑や素

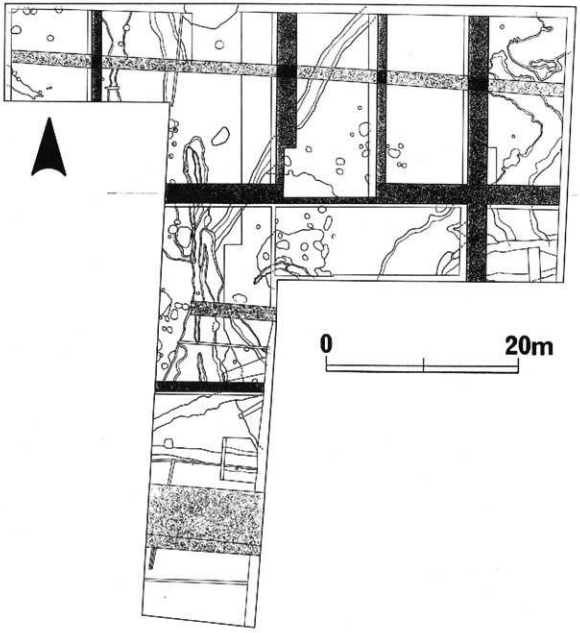



図４　調査区平面図（全体図　S＝1／400）

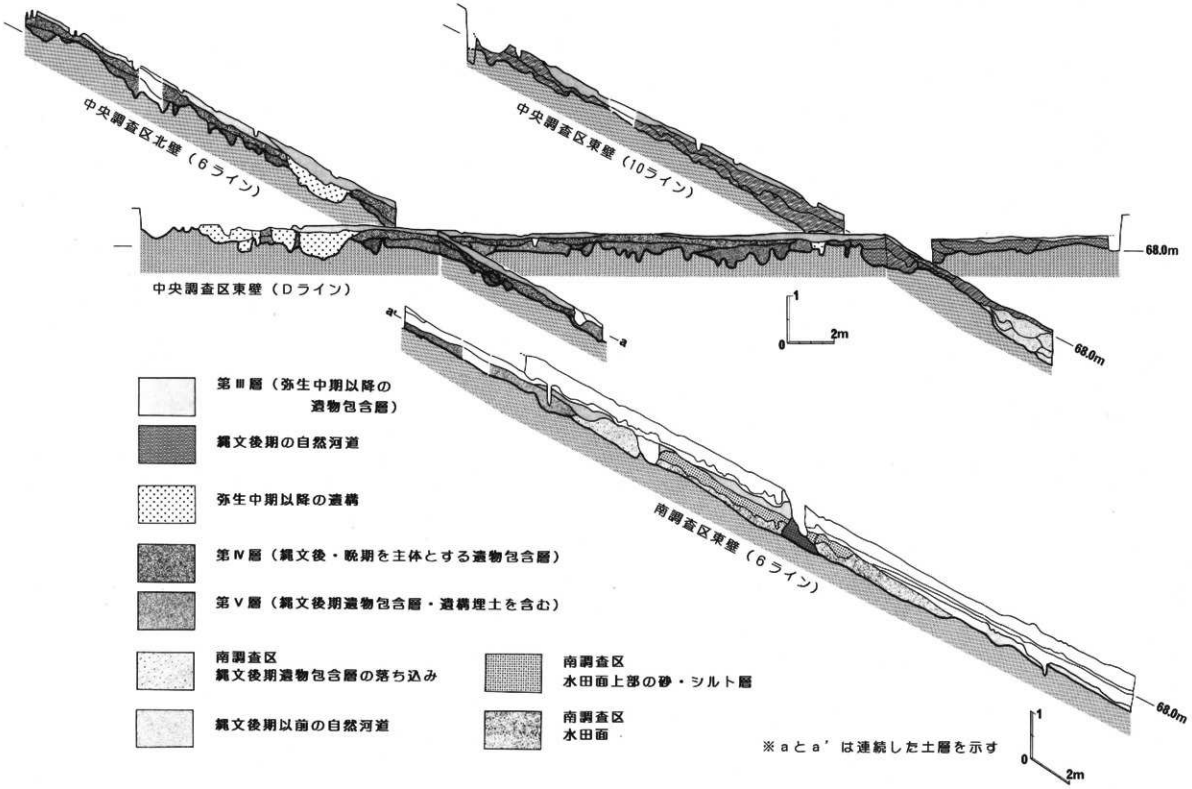



図5　中央調査区・南調査区土層図（縦S＝1／80・横S＝1／160）

掘り小溝等が検出されている。調査区のほぼ全域に均質的に分布するが南調査区では砂礫混じりとなり包含される遺物の時期も若干新しく平安期頃までのものが含まれている。西調査区においても同様な傾向を示している。全体的に東に向かって層厚、遺物量ともに希薄となる。

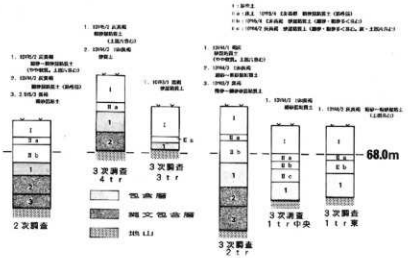



図6　各次調査地点間の層序対比（S=1／40）

第Ⅳ・Ⅴ層はともに縄文後期を主体とする遺物包含層である。上部の第Ⅳ層には縄文晩期の突帯文土器なども混在するが、遺構埋土相当の堆積と一括した縄文後期遺物包含層下部の第Ⅴ層では新しい時期のものは一切含まれておらずわずかに縄文中期末葉の土器を含むのみであった。第Ⅳ層は暗黒褐色砂混じり粘質土で中央調査区の中ほどに浅く0.25m程度の厚さで堆積していた。第Ⅴ層は黄灰・灰黄褐色の砂混じり土である。下位の第Ⅵ層との層理面付近では薄くシルト質土が介在する。全体的に若干の砂礫土ブロックを含み基本的には砂質土の堆積となっている。西調査区では地山相当層直上の褐灰色砂質土、南調査区北側ではさらに下位でにぶい黄褐～黒褐色の砂質土と粗砂の厚い包含層の落ち込みがあり、いずれも遺物量が少ないながらも第Ⅳ・Ⅴ層と対比できる層準となる。

第Ⅵ層は地山相当層である。西調査区の西端と中央調査区の北東では黄褐～灰黄色の粘土・シルトとなって安定した基盤層を成すが、中央調査区の10ラインの北端付近から南調査区の北辺りまでは灰黄・灰白～にぶい黄橙色砂・シルトを主とする不安定な無遺物層の堆積となっている。

続いて前記の第１次調査における基本層序を踏まえたうえでその後の第２次、第３次調査区の層序との対応関係からの旧地形復元により遺跡の拡がりについて考えておく。第１次南調査区北端西隣の第２次調査区では中央調査区と同様の層序が確認できたが地山面の標高値は67m前後と低くなる。国道169号線を隔てて西側、南調査区の対向位置にある第３次第１トレンチでは純粋な縄文後期遺物包含層は存在せず標高67m付近で地山となり、同第２トレンチで地表面は北側に向かって一段高い微高地となるものの砂質土壌の縄文後期遺物包含層が厚く堆積して地山面は低く局所的に落ち込む状況を呈した。同第３トレンチでも第１次調査地の第Ⅲ層に相当する堆積層の直下で地山となり、さらに一段高くなった北端の第４トレンチでは再び縄文後期遺物包含層が遺存した。第３・４トレンチともに地山面の標高値は68m前後と北側では高くなっていた。これらの状況から当遺跡の拡がりを考えた場合、第１次調査地北半部を中心として北東から南西に向けての領域に微高地を挟みながら展開することが予想される。そうした在り方には谷合いに近接した扇状低地からその末端に居住空間を求めた結果としての必然性が認められよう。

2．南調査区の遺構

東西４～６列、南北Ｉ～Ｍ列の範囲を南調査区とした。南調査区では**自然流路、水田跡、水田に伴う畦畔**、中央調査区西南より続く縄文後期遺物包含層の浅い落ち込み等を検出している。

自然流路は、床土層直下で検出され北東から南西の方向に水田跡上面を切り込み重複関係を示して検出されている。灰黄～灰白色の細砂を基調とした埋土で幅1.5～2.5m、深さ約１mを測る。遺物はほとんど含まれていなかった。この**自然流路**に切られた**水田跡**は上部に細砂、シルトの互層堆積による洪水砂により覆われ、先述の**自然流路**はその上面より掘り込まれていた。水田跡の時期については、これに伴う**畦畔**が現行の条里と整合する点や上面の洪水砂層中に含まれる微細な土器片より概ね中世後期の範疇で考えておきたい。なお、水田面直上で検出された人、牛の足跡より牛耕による農作業の痕跡が残ることからもその頃の帰属が考えられる。水田畦畔および水田面については一部を掘り下げ水田下面と畦畔との関係を明らかにした。水田下面は細砂・粗砂を基調とした砂質土主体の沖積土壌であり、畦畔はその直上で粘質土を積み上げたものであった。

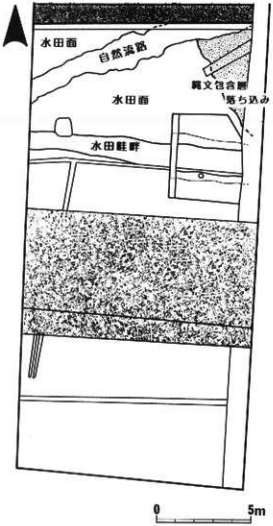



図７　南調査区平面図（S＝1／200）

写真１　南調査区北半遺構検出状況（南西から）

写真２　南調査区水田畦畔検出状況（東から）

3.西調査区の遺構

東西1～3列、南北A・B列の範囲を西調査区とした。西調査区では低地部窪みの堆積となる遺物包含層の在り方を成す中央調査区の層序とは異なり、その肩部微高地緩斜面上における堆積層序となるため遺物包含層の層順、内容ともに異なった時期幅を示すことが窺われる。また、西調査区東端では現状の条里を踏襲した地割の境界を挟むため遺構面の対応関係が不明瞭なままに調査を進めざるを得なかった。そのため出土遺物の少ない遺構の時期決定において掘り込み面が検証できなかったものについては判別し難い状況であった。

当調査区の基本層序は、標高69.5m前後の現地表面（現代の水田面）から第Ⅰ層（耕作土）、第Ⅱ層（床土）、第Ⅲ層（灰黄褐色砂混じり粘質土：中世後半期の遺物包含層）、第Ⅳ層（褐灰色砂質土：縄文後期初頭～中世前半期の遺物包含層）、第Ⅴ層（灰黄褐色砂混じり粘質土～褐灰色砂質土・細砂：地山）となっている。地山面は西端の最高所で標高68.6mで東側に向かい緩やかに下降し、西側にのみ縄文後期～弥生中期に帰属が考えられる14基の土坑、小穴が重複しながら検出されている。まとまって遺物の出土した遺構には土坑**SP02**、溝**SD401**等がある。

土坑**SP02**は東西1.0m、南北0.75mの長円形を呈する土坑である。深さ0.3mで埋土は黒褐色砂礫混じり粘質土である。遺物は弥生中期前半頃の土器片が多く出土している。溝**SD401**は最大幅2.5m、深さ0.45mを測り北側に緩く傾斜する。中央調査区西側に検出された溝**SD401**とは連続した関係にある溝である。調査区北壁の土層観察により西調査区では3時期の遺構の重複関係を確認しており、最上部は条里に伴う南北坪界溝**SD301**としたが、下位では古墳中後期、弥生後期～古墳前期初頭の溝がそれぞれに重複あるいは再掘削に伴う時期差を示している。埋土は底面より黄褐～褐灰色砂混じり粘質土（下部）、灰黄褐～黒褐色粘質土（上部）、褐灰～黒褐色砂質土（最上部：**SD301**）である。遺物は若干量の縄文後期と弥生中期の土器片を含みつつも弥生後期～古墳後期の土器片が主体的に出土している。なお、落ち込み**SO301**は第Ⅳ層上面からの遺物包含層の落ち込みであり、溝**SD501**も同様の検出面で確認しているためともに中世前半期頃の時期が考えられる。

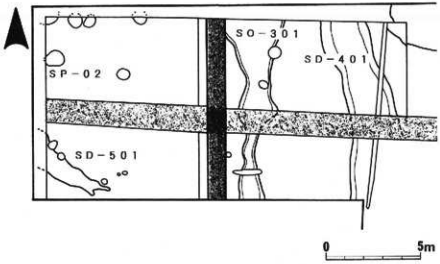



図8　西調査区平面図（S＝1／200）

写真3　西調査区第Ⅳ層上面検出遺構（西から）

写真5　西調査区北壁土層断面（南東から）

写真4　西調査区第Ⅴ層上面検出遺構（西から）

4．中央調査区東半の遺構

中央調査区の東側で遺構密度が濃く認められた部分を便宜上東半区として分離して概観する。対象となるのは東西7・8列、南北E・F列に掛かる地区と東西11・12列、南北A～F列の範囲である。

中央調査区南北アゼ（10ライン）東壁より見たこの付近の層序では、第Ⅱ層（床土）、第Ⅲ層の黒褐色砂混じり粘質土および砂質土を基調とする縄文後期～古墳後期の上部遺物包含層と続き本調査区全域に共通した堆積状況を示すが、下位では第Ⅵ層（地山）に到るまで自然流路の堆積が連続する。それらは上部と下部、最下部の流路堆積に大別でき、上部は灰黄褐～黒褐色砂礫混じり粘質土、下部は黄褐～褐灰色小礫混じり砂質土・シルト・細砂の互層堆積、最下部は褐灰～灰白色細砂・シルト・植物層の互層となりそれぞれに層相は異なっていた。分布域から見た場合に上部流路（NR402・403）は調査区東側中央に、また、下部流路（NR402）は北辺から中央で窪んで南辺に、最下部流路（NR401）では南端に厚みをもって存在する状況となり、それぞれの堆積順序を窺い知ることができる。

当該調査区ではNR401～403等の自然流路の蛇行部分が検出されているが、北側が高く南に向かって川底は深くなっている。基本的に南西方向に向う流れが考えられるが、前記の堆積層序の解釈より各流路ともに数時期にわたる河道が重複したものと思われる。調査区南東隅では先述の自然流路の最深部であり最も時期の遡る流路NR401が検出されているが、底面から下部にかけての埋土にはわずかに磨滅した縄文中期末～後期初頭の土器片、自然木、堅果類等が含まれるもの

の、遺物量は多くなかった。埋土上部では、重複した流路NR402W・Sと同様に縄文後期初頭～前半の土器が多量に出土するが器面の磨滅はあまり認められない状況であった。また、各流路ともに上部の堆積土中には縄文土器に加えて古墳前期初頭および古墳中・後期の土器を伴うため長期間にわたる自然堆積により埋没した様子が窺える。

各々の流路の規模については省略するが、最も古い流路であるNR401では最大幅4.0m、深さ0.8mを測る。他の流路では0.2～0.5mと全体的に浅く南東隅に向かい深くなっている。おそらく中央調査区東半の流路群より東側は氾濫源のような状態であったと思われ、流路NR402・403は東西アゼDライン北壁の観察により縄文後期遺物包含層である第Ⅴ層を切り込むように検出されていることから縄文後期より新しい時期の河道の氾濫に伴うものと理解できる。

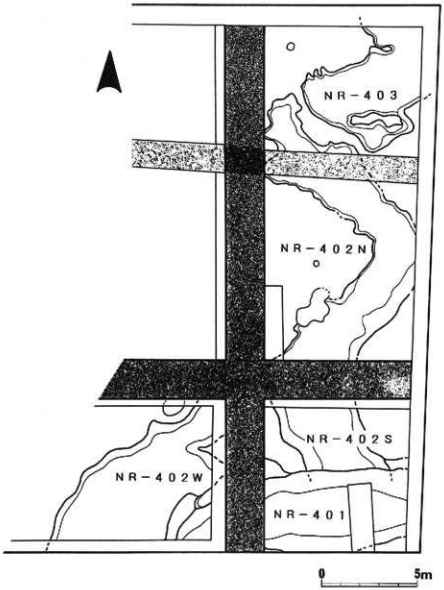



図9　中央調査区東半平面図（S＝1／200）

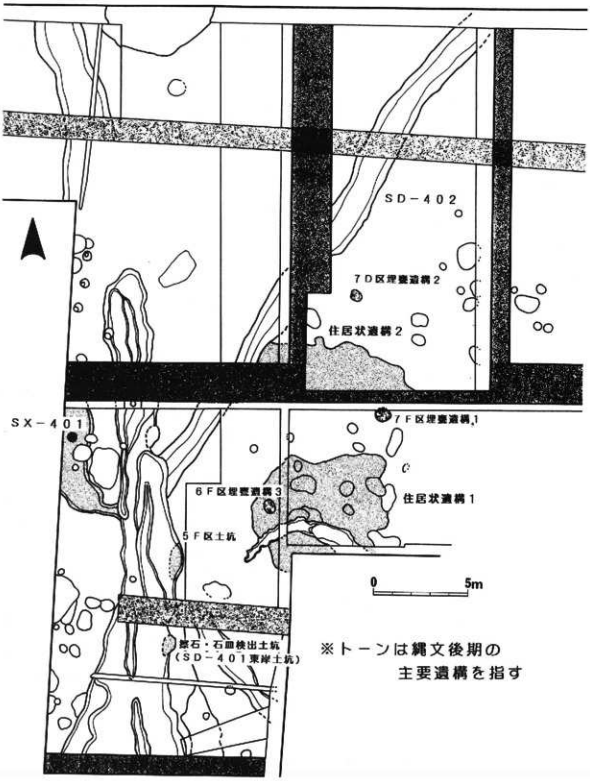



図10　中央調査区西半平面図（S=1／200）

5．中央調査区西半の遺構

中央調査区西半部は今回の調査区のうちで最も遺構の密集した地区に該当する。対象となるのは東西4～8列、南北A～F列の範囲である。当該地区における検出遺構は、縄文後期より弥生中・後期、古墳前期初頭、古墳後期、それに奈良・平安期に至るまでの各時期のものがあるが、時期の遡る縄文後期の遺構群はほぼ全面に拡がるのに対して調査区中央の弥生中期の溝を境にそれ以後の遺構群は西側のみに拡がる傾向が認められる。

当該地区の層序は当調査における基本層序として示した中央調査区の層序に準拠するものであり、遺構の検出面については調査期間、経費等の制約上から便宜上大半の遺構を第Ⅵ層（地山）上面で検出しているが、一部土層観察用アゼに掛かる遺構については掘り込み面を確認しながら検出作業を進めつつ帰属時期特定の参考材料としている。

縄文後期の遺構には、土坑、落ち込み状遺構、住居状遺構、埋甕遺構、弥生中・後期では、土坑、溝があり、それ以降には古墳前期初頭～後期の溝、奈良・平安期～中世前期の土坑、井戸や建物を構成する柱穴等が検出されている。以下、ここでは各時期の主要な遺構についてのみ概観しておきたい。

縄文後期の遺構は中央調査区の西南部に多く認められる。SD401東岸土坑は、後述する溝SD401に西半分を切り込まれているが擦石および石皿がセットを成して同時に検出されている。南

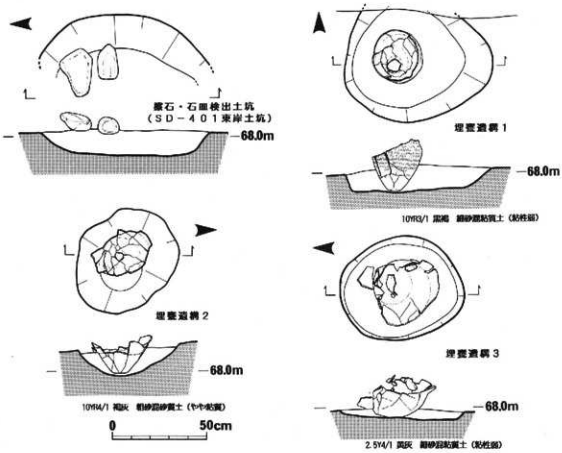



図11　縄文後期主要遺構平面・土層図1（S＝1／20）

北長径0.9m、深さ0.2mを測り、埋土は黒褐色砂混じり粘質土である。土器等は出土していないが石器類の特徴より概ね縄文後期の時期が考えられる。埋甕遺構は土層観察用アゼ壁面に掛かるものも含めて4基以上が検出されている。7D区検出の**埋甕遺構1**は東西長径0.8m、南北0.7m強の長円形を呈し、深さ0.2mで断面形状は皿状である。底面直上に土器を正置し黒褐色細砂混粘質土で充塡、固定している。7E区の**埋甕遺構2**は他に比べて少し規模の小さな径0.6m弱の円形を呈する土坑である。深さ0.2mの半円形の断面形状を呈し、褐灰色粗砂混砂質土で土器を固定する。6F区の**埋甕遺構3**は住居状遺構の内部西辺に位置する土坑であり、検出時には埋土上部よりヒスイ製大珠（首飾り？）が出土している。埋甕遺構に伴うものとすればこの種の遺構の性格付けを考えるうえで興味深い事例となるものである。東西短径0.5m、南北長径0.6m、深さは検出時の残存部分では0.1m以下と浅くなるが、実際には深くなっていたものと思われる。土器はやや傾きつつも底面直上に口縁部を上方に向けて据え置かれ、土坑の断面形は皿状を呈する。これらの埋甕遺構に埋設される土器はいずれも浅い土坑内に底部穿孔の施された土器を正置する点で共通する特徴を示し、出土土器に若干の時期幅を認めることができるが、いずれも同様の秩序のもとに据え付けられていることが窺る。また、**SD401**東岸南の**5F区土坑**では底部に焼成後の穿孔が認

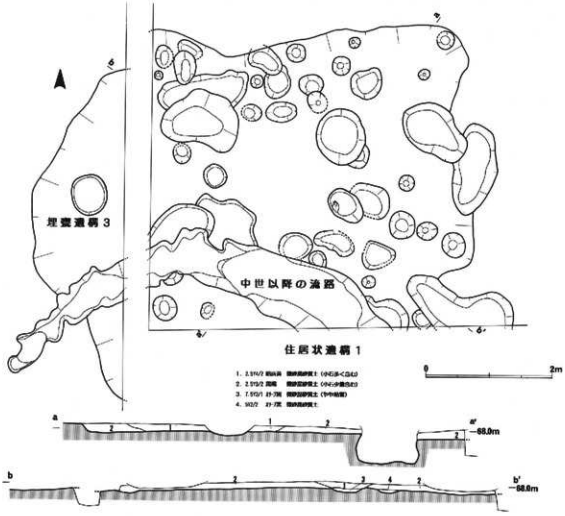



図12　縄文後期主要遺構平面・土層図2（S＝1／60）

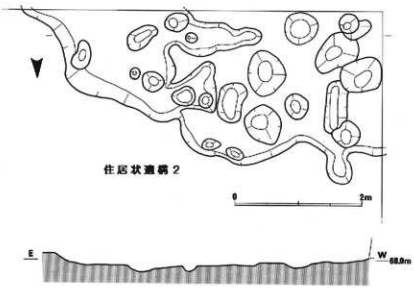



図13　縄文後期主要遺構平面・土層図3（S＝1／60）

められる肩部の張りが著しい粗製の深鉢が横転した状況で検出されているが、土器底部に見られる前記の特徴よりこれについても埋甕遺構と考えられるものである。

中央調査区西南では不整形な浅い落ち込み状の土坑が2基検出されている。これらは、いずれも底面直上に小規模な柱穴相当の小穴が多く認められるため明瞭な平面プランは認められないものの住居状遺構として調査を進めた。**住居状遺構1**は東西幅8m弱、南北幅6m以上の規模を呈し、上部に重複する土坑や床面に多くの小穴、西辺に**埋甕遺構3**が付随するように検出されている。埋甕遺構との併存関係については不明確であるが、住居内に付設する事例も多くあるため同時期のものでないと言い切ることもできないであろう。北側の**住居状遺構2**は北半分のみ検出し得た同種の遺構であるが、東西幅6m以上、南北幅3m以上の規模となる。これらの遺構は近接し、出土遺物も少ないため時期的な前後関係は不明であるが、広範囲に拡がる同一の遺構であることも考えられる。他に溝状の浅い落ち込み**SX401**があるが、第Ⅳ層遺物包含層の0.2m程度の落ち込みと考えられるものである。一部分のみ土器片の集中部（図10の当該遺構のドット部分）があり、ほぼ完形に復元可能な大型深鉢が出土している。

弥生中・後期の遺構には土坑**SK401**、溝**SD402**等がある。土坑**SK401**は長辺2m強、短辺1.2mの不整形な長方形に近い平面形の土坑である。深さ0.5mを測り、埋没に伴う埋土上部の堆積土より若干量の土器片が出土している。大型大和形甕の部分破片や流水文、櫛描き直線文の破片等の出土から概ね弥生中期前半期頃の帰属時期が考えられる。溝**SD402**は中央調査区西半を南西から北東にかけて斜行する幅1.5～2.0mの溝である。この溝より西方では標高値も高く地形的に微高地に移行することと、溝埋土出土土器と同時期の遺物の分布が西側にのみ認められる点から考えると集落域を区画する環濠としての機能も考えられる遺構である。出土土器については埋土の上・下層ともに同様の時期幅で出土しており、前記の土坑**SK401**とほとんど同時期の弥生中期前半期頃に溝としての機能を失ったものと思われる。

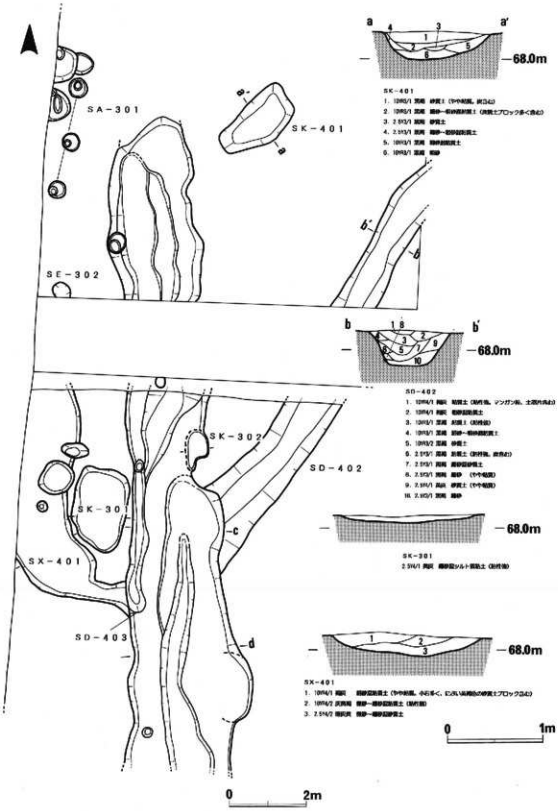



図14　中央調査区西半の主要遺構平面・土層図（平面S＝1／100・土層S＝1／40）

溝SD401は西調査区検出の同名遺構と連続すると考えられる大溝である。北端を後世の削平により欠失してはいるがわずかに窪みを残し南方に傾斜して延びることを確認している。この溝の南方では南調査区の低地部に至り上面を中世の水田面により削られた状態であった。また、南調査区のすぐ北側の付近では重複関係は不明瞭ながらも、おそらくこの溝の掘り込み面より下層に拡がる砂層の落ち込みの上部に溝が掘削されていることを確認している。溝の掘削時期については後述する土坑SK302が溝の東岸で切り込まれ、西岸においては内部に断続的に検出される幅0.5～1mの小溝が溝SD401の底面を掘り込むように検出されていること、両遺構ともにこれらの部分で出土する土器が弥生後期末頃の時期を示すことによりその直前の弥生後期後半頃と考えることができよう。西調査区の溝SD401では最上部の中・近世の条里に伴う溝を除き弥生後期～古墳前期初頭と古墳中後期の2時期の重複が考えられたが、中央調査区の溝SD401でも同様の在り方を示し、埋土中の出土土器の年代観も一致するため同方向に重複する溝が連続して数度の再掘削を繰り返したものと思われる。なお、溝の規模、堆積層序等については図を参照されたい。

土坑SK302は前記溝の東岸に重複して検出された土坑である。東西幅0.6m、深さ0.1m程度の長円形を呈する。南側に角上に突出する部分がありここより469の受け口口縁の鉢が口縁を上方に向けて正置された状況で出土している。

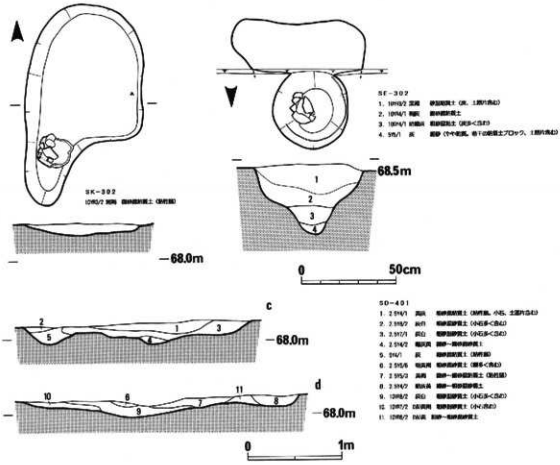



図15　主要遺構平面および土層図（上半S＝1／20・下半S＝1／40）

井戸SE302は中央調査区東西アゼ西端のすぐ北側に接して底面付近のみを検出しているが、未発掘のアゼ部分に掛かる南半分の土層観察により実際には上部より底面までの約0.5mの深さを確認している。アゼ部分に掛かる南半の上部検出面から平面形が方形に近いものであることがわかるが、中世以降の削平がかなり下位までに及んだことも示す。井戸の底面付近では漏斗上の断面形状の中位で曲げ物枠の残片が高さ2～3cmで半円形に遺存していた。その内部より470～472の黒色土器A類の椀、甕等が出土している。帰属時期については奈良時代末頃と考えられる。

土坑SK301は東西1.5m、南北2.0mの規模を呈する隅丸方形の浅い土坑である。埋土より黒色土器A類の椀473と土師器長嗣甕の破片474が出土している。平安前期の帰属が考えられる。

柱穴群は約1.5m間隔で南北に2間並ぶが東西の規模、時期については不明である。

## Ⅲ　出土遺物

### (1) 縄文土器類

縄文土器は出土土器の大半を占めており、コンテナ約70箱の数量で後期の縁帯文土器を主体とした多くの破片資料が出土している。出土層位的には第Ⅲ・Ⅳ層出土のものが数量的に多く遺構出土の資料もわずかに認められる。出土した縄文土器には、条痕、ナデ、擦痕等の器面調整が施される無文土器類と縄文や沈線、隆帯で器面を飾る有文精製土器類の両者があり、時期については後期初頭～前葉に帰属が求められる土器群である。

本項では遺物包含層出土の多量の破片資料から当遺跡における当該期土器の組成を抽出できるように可能な限りの点数での図化をおこない当該期土器研究にに供するよう努めた。各土器のの概要を記すにあたり、形態、文様等の諸要素から分類、類型化をおこない特徴的なものについて詳述することにした。また、出土地点、層位やその他の観察項目については文末の観察表に簡略化してまとめておいたので参考にされたい。

1．無文粗製土器

深鉢形土器の頸部より上位の口縁部形態よりA類（内湾口縁）、B類（直線的口縁）、C類（外反口縁）の3種に大別し、さらに口縁端部の形状から1類（細かく面取りして丸くしたもの）、2類（端部は丸く、外端面を肥厚気味に拡張させたもの）、3類（面取りして角張らせたもの）に細分してこれらの組み合わせによる類型化をおこなった。なお、浅鉢形土器については数量も少ないため端部形状の分類のみに留めた。また、無文土器の調整手法の類別はせずその都度特徴的なもののみ報文中に触れるようにした。

**［A 1 類］**内湾口縁で端部を丸くしたものを指す。**(22・28・30・34・36・300)**

器面調整では28・30がミガキ様ナデ、他は条痕調整が主となる。施文原体の特定されるものには36の巻貝、300の二枚貝等が看取できるが、いずれも他の土器と同様に横位に施すものが通例となっている。

**［A 2 類］**内湾口縁の端部を丸くしつつ外端面を肥厚させたものを指すが数量的には極めて少ない。**(46・303・305・311)**

46は内外面ともに条痕調整が認められる。形態的に見て外端面の肥厚は丸く他の2類と若干異

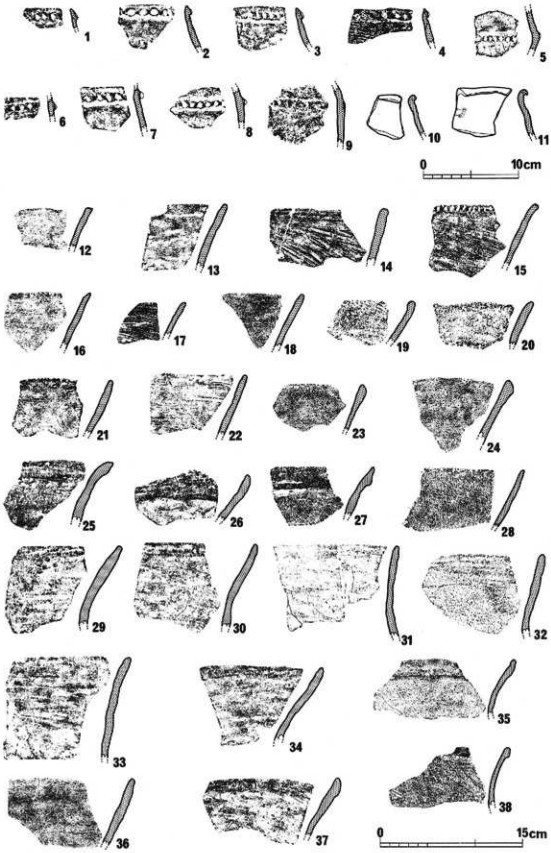



図16　出土遺物実測図1（土器類・S＝1／4）

なった印象がある。ここでは一応A２類として分類したが器形的には浅鉢になるかもしれない。311は口縁端部を欠損するが口縁の形態からこの類型に該当するものと思われる。

［Ａ３類］内湾口縁の上端を面取りし矩形あるいは隅丸方形に角張った端面としたものを指す。

(14・299・310・352)

数量的に少なく、図示した４点もそれぞれに異なる特徴を示している。14は外面に斜位の巻貝条痕が明瞭に残り、内面は横位のミガキ様ナデが施される。352は端部が内側にわずかに肥厚するのが特徴的であり、調整も外面では縦位に二枚貝条痕を施したのち口縁付近も横位に同じく二枚貝条痕を巡らしている。内面には横位のミガキ様ナデが施される。色調も他の土器とは異なり黄白色を呈するものである。310は頸部以下も残るため全形を知ることのできるものである。口縁端部の形状に小差は認められるが279の深鉢と同様のプロポーションを示し概ね北白川上層１式に帰属が求められる。

［Ｂ１類］直線的な口縁で端部を丸くしたものを指す。

(13・18・20・31～33・40・43・297・301・302・307・354)

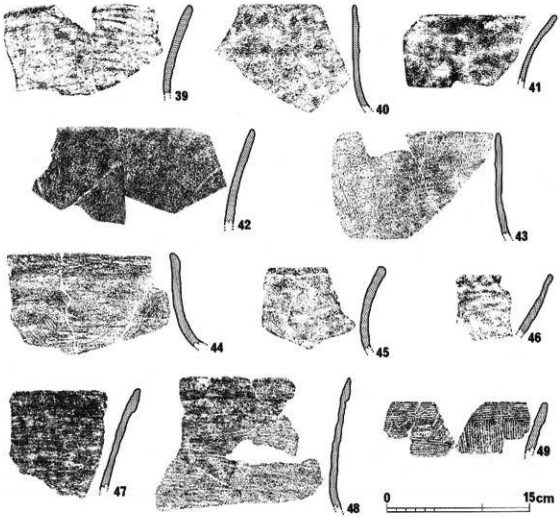



図17　出土遺物実測図2（土器類・S＝1／4）

器面調整においては内外面ともミガキ様ナデ調整が主体を占めるが、調整技法上特徴的なものとして13・32・359が挙げられる。13は内外面に横位の削痕を施す。32も13同様、外面に削痕が認められるが、内面をミガキ様ナデで仕上げる。354は内外面とも二枚貝条痕を施し、口縁部上端付近まで条痕を巡らしている。

［B 2 類］直線的な口縁で端部を丸くしつつ外端面を肥厚させたものを指す。

(23・24・26・37・44・304・353)

二枚貝条痕調整の353を除き、他の土器の調整は内外面ともミガキ様ナデである。353の口縁部上端付近にヨコ方向、下端以下は斜め方向の条痕を施文する。

［B 3 類］直線的な口縁の上端を面取りし矩形あるいは隅丸方形に角張った端面としたもの。

(12・29・39・298)

29・298はともに内外面をミガキ様ナデ調整をする。12は外面を条痕、内面はナデで仕上げる。39は外面に幅の広い巻貝条痕を施し、内面にはミガキ様ナデ調整が見られる。

［C 1 類］外反口縁の口縁端を丸くしたものを指す。(17・41・306・309)

41・306・309はいずれもミガキ様ナデ調整をおこなう。17は内外面ともに二枚貝による条痕を施す。なお、外面調整においては、ナナメ方向への条痕を施文する。

［C 2 類］外反口縁の口縁端を丸くしつつ外端面を肥厚させたもの。(25・35・308)

25は外面を削痕状ナデ、内面をミガキ様のナデ調整をする。

［C 3 類］外反口縁の口縁部上端を面取りして角張った端面としたもの。(45)

45の調整は内外面ともにミガキ様ナデである。

［D類］口縁形態より前記の分類に該当させることが可能であるが、器面調整あるいは細部の特徴から外来系要素を含むものとして認められるものを一括してD類とした。

(15・16・21・47～49)

15は口縁端部が先端付近でやや外反する口縁形態をもち、端部には刻み目を施す。こうした特徴は後期初頭の中津・福田K２式の口縁端部形状に酷似する。若干の形態差はあるものの、中津式の範疇に同様の口縁形態のものも見られるため、続く福田K２式に直続する過渡的な形態として理解することもできよう。16は口縁部の内側に内傾する端面を作り出す点が特徴的である。また、21は内湾口縁と丸い端部によりA１類として分類できるものであるが、前記の16とともに浅鉢形の器形を呈するものと考えられる。47・48は同一個体であると思われるが、外面調整にハケ目状工具による条痕調整が施され、山陰から丹後半島付近にかけての日本海岸沿いの地域の土器にみられる特徴を示す。時期的には北白川上層２あるいは３式期に併行するものと考えられる。49にも47・48と同様なハケ目状工具による条痕調整が認められるが、前者に比べて整然とした調整痕を残す点で少し印象の異なるものである。同様な土器は京都大学植物園内遺跡においても出土しており時期的にも同様に北白川上層２あるいは３式期併行と考えられる。

２．有文精製土器

有文精製土器については現状の当該期土器研究における型式分類を基準とした時期区分に基づき、器形あるいは口縁部形態、文様の特徴により以下のように分類した。

**第Ⅰ群**

芥川式及びそれに先行する土器群を指す。(79・186・197・206・211・249・314・327・372)

79は波状口縁部片で、端部は「く」の字状に内傾屈曲する。口縁外端面の2条沈線間に縄文を施す。施文法より山陰の布勢式に近いものと見られ比較的古い段階のものと考えられる。186は胴部下半の区画沈線より下位に屈曲文様を描き、文様構成は四ツ池式か北部九州の鐘崎式に類似する。197は口縁の2条沈線間に刺突を加え、胴部に斜方向の浅い条線を入れるもので布勢式に極めて類似する。206は稀有な例で、口縁内面側に面取り様の削りが施される。こうした手法的な特徴から南九州系の土器に類似するが、縁帯文とは若干異なる製作意図が看取される点より注口土器とも考えられよう。211は波頂部から三角文様の区画内部を弧状沈線で埋める文様が見られ、口縁端部に刻み目をもつことから中津～福田K2式の間の影響が考えられるもので京都大学植物園遺跡に類例が求められる。249は胴部の張る器形の上位に四角形の区画文を施すもので四ツ池式段階と捉えることができる。314は縄文原体の撚りがR・LLと稀で、口縁端部上より粘土を付加させる点が瀬戸内的な特徴を示す。327は口縁端部が内側に肥厚し上端に縄文を施文する。胴部には沈線が見られ、中津3式に比定される要素をもつ。372も中津式と思われるもので底部に1条の沈線を巡らす浅鉢の底部付近と思われるものである。

**第Ⅱ群**

当遺跡出土の縄文土器類の主体となる土器群であり北白川上層1～2式に比定される。器形、調整等の特徴によりさらに細かく分類し以下の各類ごとに示した。

**［A類］**口縁部外面を肥厚させ、縁帯部に沈線で施文する深鉢。

**A1類**（81・83～85・90～92・94～98・100・102・103・105・119・187・214・292・316・317・322・326）

縁帯部に直弧文、あるいは直線文を施し、頸部には多条沈線文と無文の双方が見られる。頸胴部区画沈線は共通して認められる特徴であり、内外面調整はミガキ様のナデが主体的である。

292は住居状遺構2出土の資料である。

**A2類**（77・86・107・108・112・116・213・289・363・373）

縁帯部に長方形区画文、あるいは同心円文に直結する平行沈線を施す。破片資料のため区画文と判断し難いもの（77・116・363）もここに含めた。縄文地のもの（77・107・112・363・373）もあり区画文間に1条の横走沈線を施す112は北白川上層式の中でも古く位置付けられる。内外面調整ではミガキ様ナデ、またはナデを施すものが多く認められる。住居状遺構1出土の289はU字型の区画文が施される。

**A3類**（73・74・114・320）

縁帯部は縄文地に沈線文を施す。直弧文、山形文、平行沈線文などが認められる。

**［B類］**口縁端部が内湾もしくは立ち上がる口縁部を有する縁帯文系土器群を指す。

**B1類**（45・87～89・106・109・212）

口縁部を内湾させるもの。北白川上層1式に比定される。

87～89・106はいずれも口縁部に同心円文を施す。そのうち87・89は胴部に縦方向条線を巡らす。87は縁帯の波頂部にあたり同心円文の中央を刺突により凹ませる。109は縄文地に3本沈線の区画

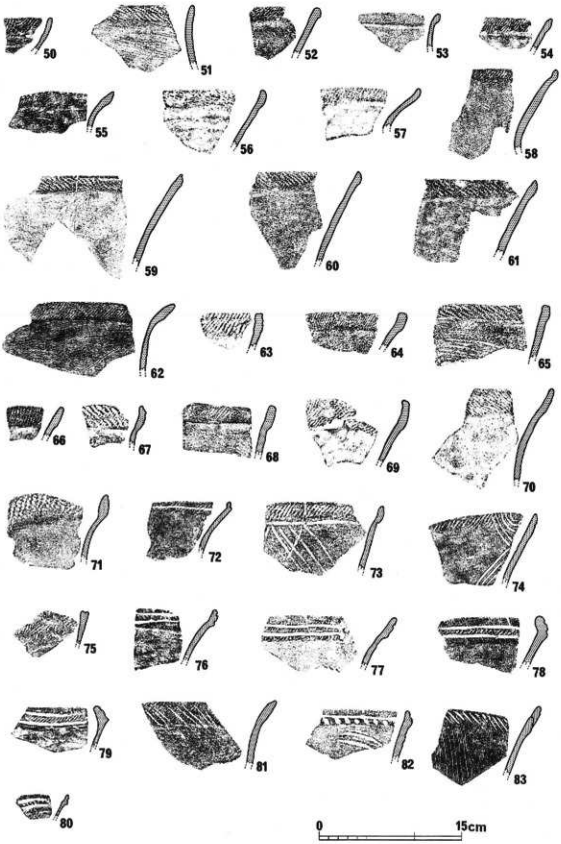



図18　出土遺物実測図3（土器類・S＝1／4）

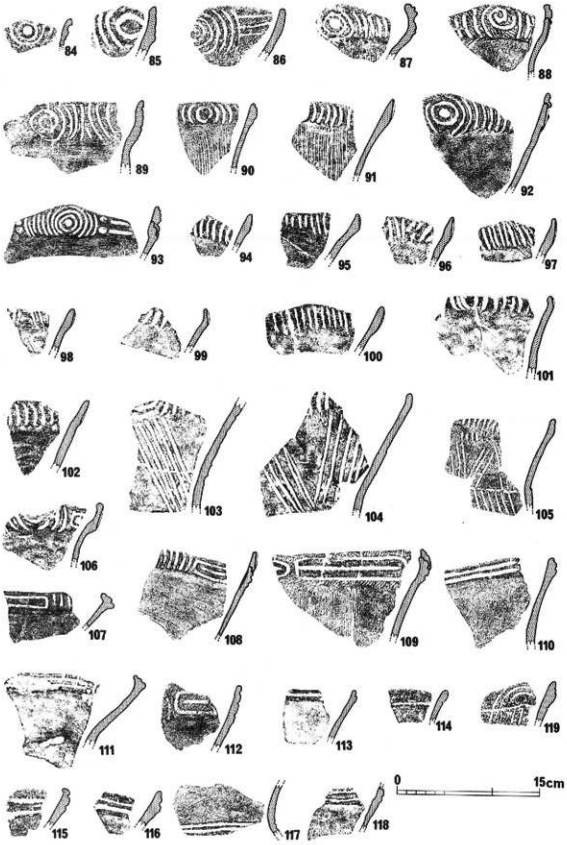



図19　出土遺物実測図4（土器類・S＝1／4）

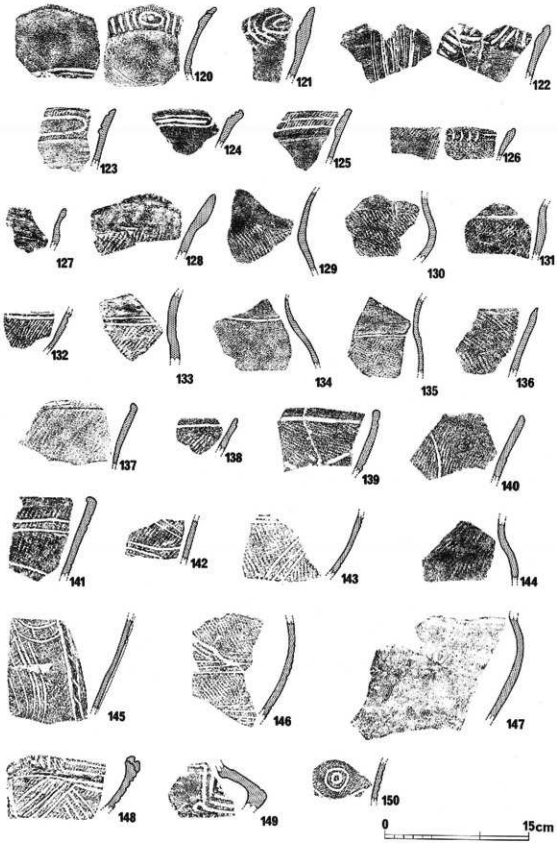



図20　出土遺物実測図5（土器類・S＝1／4）

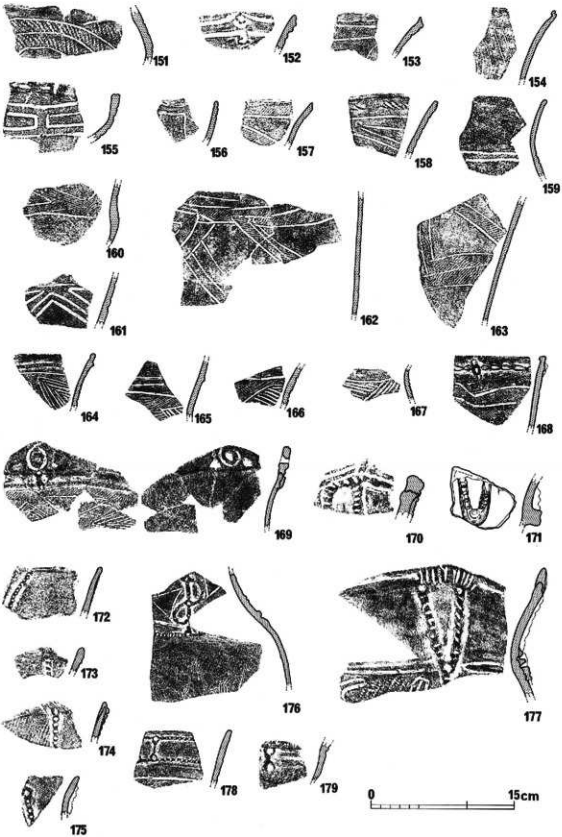



図21　出土遺物実測図6（土器類・S＝1／4）

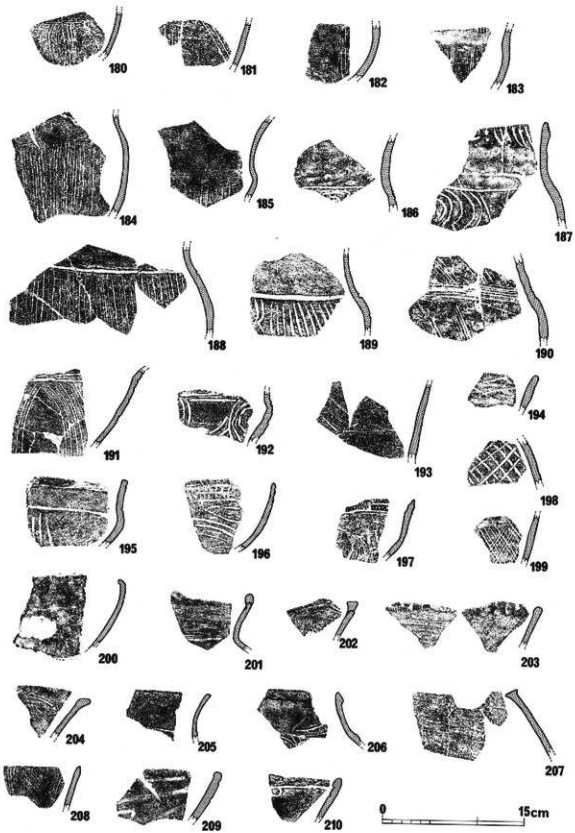



図22　出土遺物実測図7（土器類・S＝1／4）

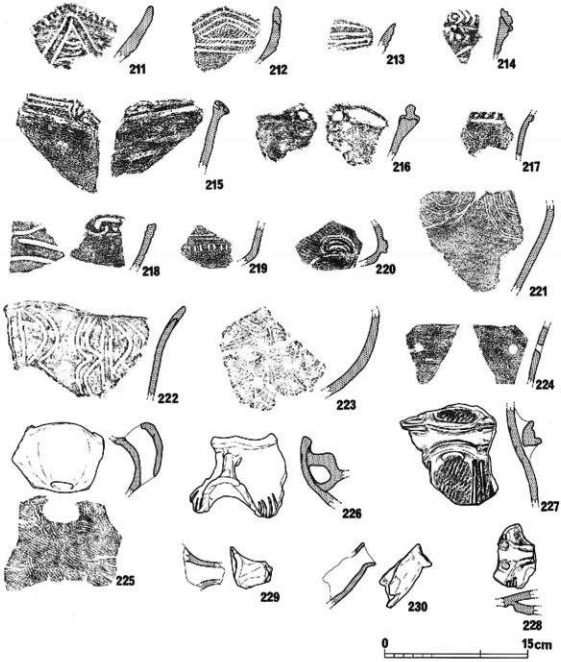



図23　出土遺物実測図8（土器類・S＝1／4）

文を施文するもので胴部には5条／1帯の縦条線を施す。外面にはミガキ様ナデ調整が見られる。212は他例と若干様相が異なり口縁部に縄文を施し波頂部に沈線による三角文が描かれるもので京都府桑飼下遺跡に類例が見られる。

**B2類（76・99・101・104）**

口縁部を外反させた後、端部をやや上方へ立ち上がり気味に仕上げたものである。北白川上層1式に比定される。

99・101・104は口縁部の縁帯外面に刻み目をもつ。104は胴部に5条の斜行沈線を施文し、76には口縁部の縄文帯に2本の沈線を加える。いずれも調整は内外面ともミガキ様ナデで仕上げている。

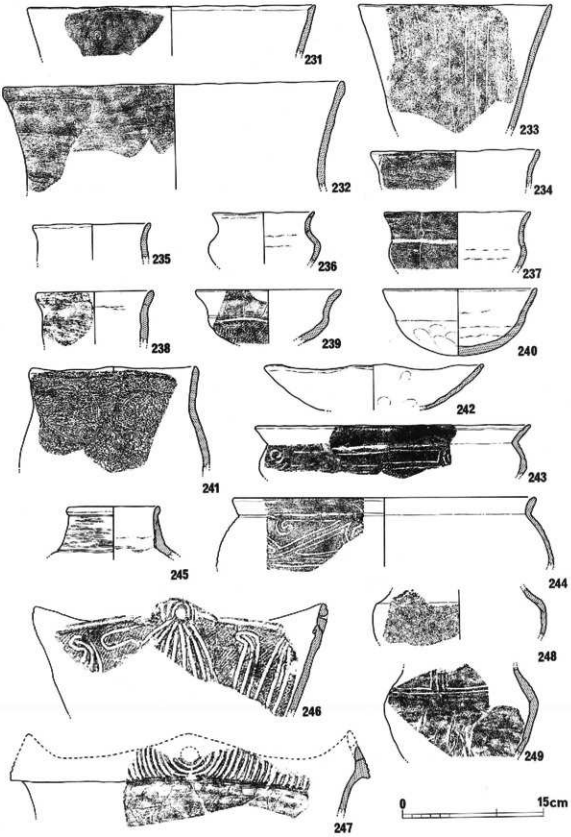



図24　出土遺物実測図9（土器類・S＝1／4）

［C類］

口縁部内面を肥厚させる深鉢を指す。(120～126・359)

120～122の波状口縁の波頂部はいずれも竹管原体による同心円文が認められる。縄文地のものは120・126・359で、120は内面口唇部のみ、126は外面肥厚部にそれぞれ施文される。123・125は磨消縄文である。縁帯部直下の段が明瞭に残るもの（120・123・125）は古い様相を示しており、外反口縁を成す124は舟形の器形が想定される。126の外面には赤彩が看取される。

［D類］

外面に斜格子状沈線文を有す深鉢である。(194・198・199・342・345)

194・208は両者ともに口縁～体部にかけての破片資料であり、口縁部を外面に肥厚させる点で共通するが、208の斜格子文は細筋の沈線により山形文が描かれる点で前者とは異なる。198・199・343・345は胴部破片資料でありヘラ状工具による斜格子文を施す。全体的に器壁は薄く、198は他に比べやや大まかに斜格子状に施文する。

［E類］

口縁部外面を肥厚させ縁帯部外面に縄文を施した深鉢で、頸部は無文である。特記するもの以外の撚りはRL、LRのいずれかでありそれぞれ同じ割合で出土している。口縁形状には水平、波状の両者が存在する。

E１類（53・56・57・64～67・69～71・318）

口縁部が内湾気味に立ち上がるものを指す。頸部内外面にはミガキ様ナデもしくはナデを施すが、65には巻貝条痕が看取できる。57は強く外反した口縁形態から、浅い器形が考えられる。53の外端面の縄文はLの無節縄文である。

E２類（54・55・58～61・258・285）

口縁部外面に面をもち、口縁部先端が尖り気味になる。内外面にミガキ様ナデ調整を施すものが主となるが、51には両面に二枚貝条痕が認められる。55の外端面にはLの無節縄文が認められる。285は住居状遺構１出土である。

E３類（51・62・159）

強く外反する口縁で内外面ともにナデ調整が施される。頸胴部に区画沈線を巡らせた159は口縁部上端と体部に縄文を施し、内面はミガキ様のナデ調整である。

E４類（50・52・63・75）

口縁部上端にも縄文を施す。50は上下交互にLの縄文を施文しており、京都府北白川追分町遺跡に類例を求めることができる。口縁形態より浅い器形が考えられる。52はL、63はRの縄文が施される。75は口縁部上端に浅い凹みが見られる。

［F類］浅鉢と思われるものをF類とし、さらに体部の縄文の有無により細分した。

F１類（127～136・144・147・195・239・248・319・336・355・371）

外面に縄文を施した鉢である。239は頸胴部区画沈線をもち、体部に縄文を施文した北白川上層期の典型的な浅鉢である。その他、２条の区画沈線をもつものや区画文をもたないもの、羽状縄文や口縁部外面と体部に縄文を施すものがある。128は北白川上層式に特有な外面肥厚する口縁

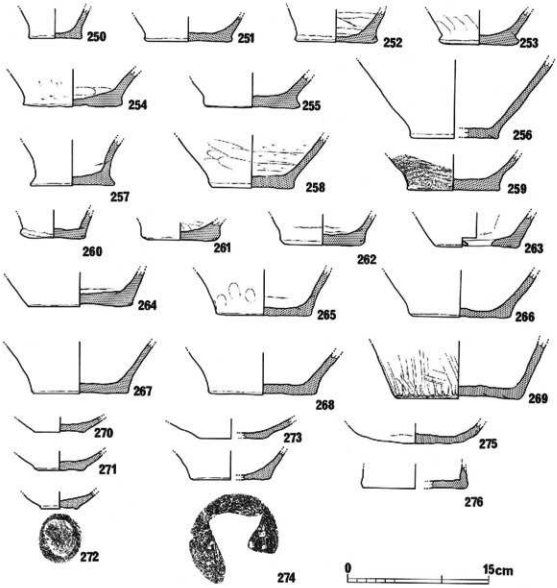



図25　出土遺物実測図10（土器類・S＝1／4）

に、近畿ではあまり散見されない体部に縄文を有すという特異な要素をもつ深鉢である。

**F 2 類（200・205・219・235～238・240・242）**

外面に縄文を施されないものを一括した。**237**は頸胴部に区画沈線をもち、F 1 類とF 2 類の中間的個体である。**219**は区画沈線下に刻みを入れる胴部片で、大阪府高槻市芥川遺跡に類例が求められる。無文浅鉢の口縁は外反するもの（**205・235・236・238・240**）、波状を呈するもの（**242**）、内湾するもの（**200**）など様々なバリエーションが存在する。

［**G類**］当該期に比定される胴部片を一括し文様形態により細分した。

**G 1 類（180～185・188～191・221・295・338～341・343・344・367・368）**

縦方向の多条沈線を施す一群である。頸胴部に横方向の区画沈線を巡らせるものとそうでないものとがあり多条沈線にも直線文と曲線文とのバリエーションが認められる。**295**は住居状遺構

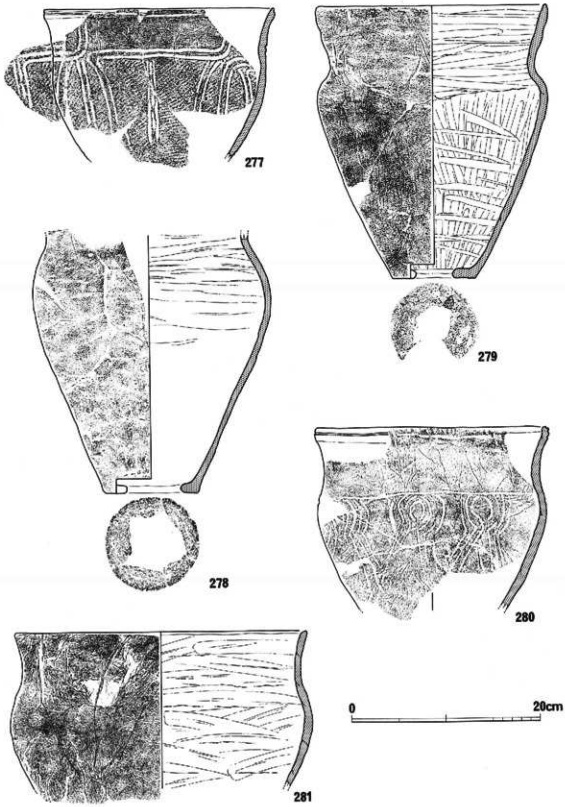



図26　出土遺物実測図11（土器類・S＝1／4）

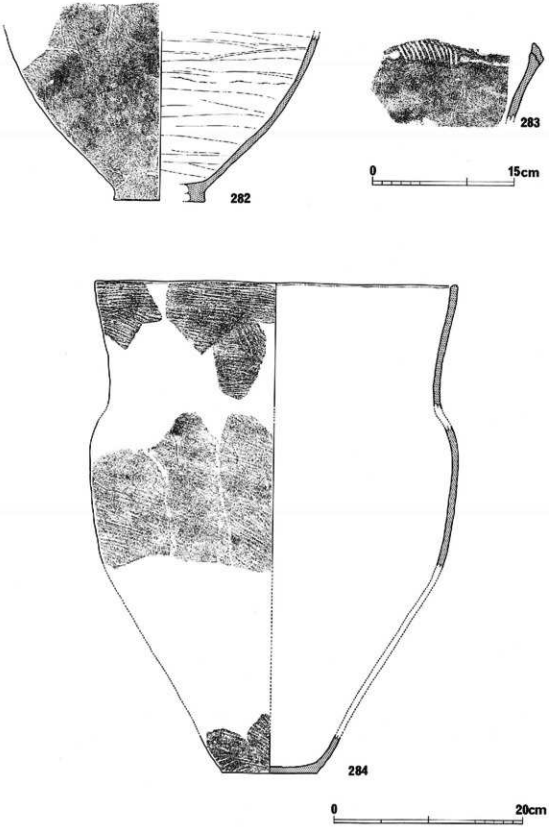



図27　出土遺物実測図12（土器類・S＝1／4）

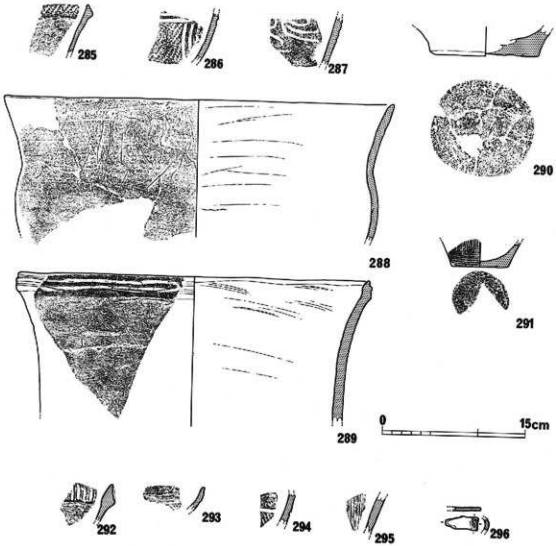



図28　出土遺物実測図13（土器類・S＝1／4）

2出土の資料である。

**G 2 類（117・118）**

頸胴部に2条の沈線を巡らせる一群で頸部は無文である。

**G 3 類（151・286・294）**

縄文と沈線により施文する一群である。151は3本の沈線にRの磨消縄文を施す古い様相と縦方向の多条沈線を施文する北白川式の範疇の様相とが混在した文様モチーフである。近畿地方出土の当該期の土器様相の中でも非常に希少な例と言えよう。286・294はそれぞれ住居状遺構1および2出土である。

**第Ⅲ群**

北白川上層3式に比定されるものである。（210・356）

今回の調査で出土した縄文土器のうち北白川上層3期に比定されるのは前記2点のみである。

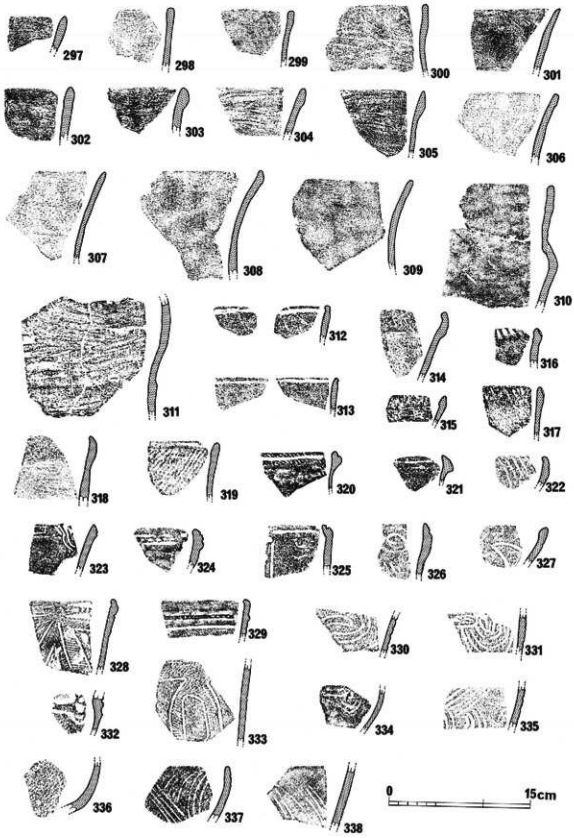



図29　出土遺物実測図14（土器類・S＝1／4）

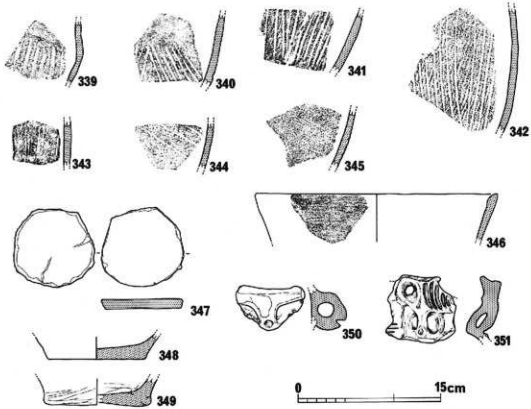



図30　出土遺物実測図15（土器類・S＝1／4）

**210**は口縁部に巻貝による擬縄文の認められる浅鉢である。内面に区画沈線を巡らし、その直下に円形施文をおこなう。内外面ともにナデ調整である。**356**は口縁端部に面をもち外面に３本の沈線を施文する磨消縄文の浅鉢である。

**第Ⅳ群**

堀之内式に相当する土器を一括し、ここでは堀之内系有文土器として扱う。また、文様形態により３類に大別する。

［Ａ類］胴部に三角形をモチーフとした文様を描くもの。総じて堀之内１式または２式の範疇に帰属するものと考えられるが、いずれも時期を特定できるような判断材料を欠く。

（**139**・**141**・**142**・**143**・**148**・**153**・**154**・**157**・**158**・**160**～**166**・**169**・**176**・**328**・**365**・**366**）

（**168**・**172**～**175**・**177**・**178**・**179**・**329**・**332**・**357**）

特徴的な様相を示すものに**139**や、三角文とともに有刻隆帯を伴うものが挙げられる。**139**は極めて稀なＲの撚りを施す。胴部文様も三角形もしくは四角形であると考えられ、形態的には瀬戸内の平城式に類似する。そのため縁帯文系でも別の系譜上にある土器として考えられるものである。次に、有刻隆帯を伴うものでは**164**・**165**・**176**・**328**があり、口縁部を外反させつつ端部を内へ丸く収め、外面口縁部と平行に隆帯を貼付する。**165**も同様な形態を呈するが、**176**は前三者とは様相が異なり口縁部付近に横位の有刻隆帯を施した後、８の字状貼付文を垂下させ下部の横位隆帯と連結させる。このような在り方は後述する**178**に類似する。また、胴部に三角形の磨消縄文を施文し、器形的にはバケツ形になると考えられる。**169**は波頂部片で口縁と平行に凹線を施し、下端

に刻みを施す。また、前記の土器群に加えて次のような有刻隆帯をもつ一群が堀之内系内で普遍的に認められる。これらも第Ⅳ群A類に加えておく。172〜175はやや外反させ、端部を丸く収める口縁形態を呈し、外面波頂部から胴部へ縦もしくは斜方向へ隆帯を垂下させる。うち175は口縁上端に縄文を施す。329・357は口縁部と平行に隆帯を付加させるが、329は外面隆帯下部に区画沈線を施し、区画内に縄文を施す。

357は内面に一条の沈線を有する。168・178・179・332は、176と同様に外面に8の字状貼付文を施すが、胴部文様については不明である。177は他例と比べて異質であり頸部に2条の区画沈線を巡らし、その下部からV字状有刻隆帯を貼付する。胴部は沈線間に縄文を充塡した鍵手状文を施文する。内面調整はミガキ様ナデである。

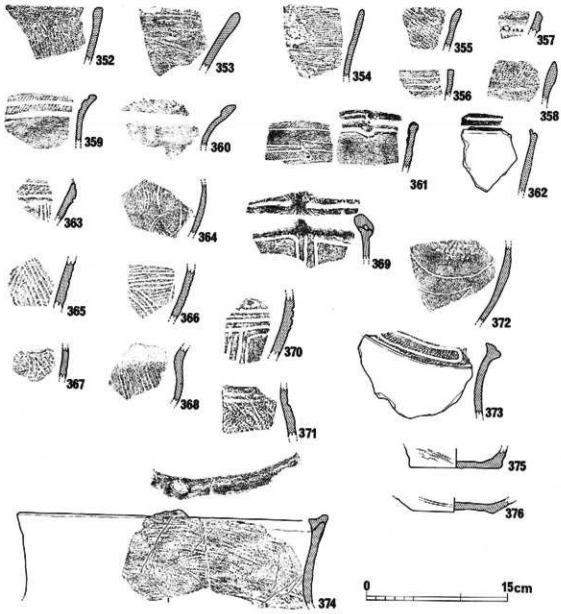



図31　出土遺物実測図16（土器類・S＝1／4）

［B類］その他の沈線文を施すものを一括する。

a．1～2条の沈線文（113・321）

321は外面肥厚型口縁を呈する。

b．入組文（330）

磨消縄文で施文する。内面をミガキ様ナデ調整し器壁は薄い。堀之内2式に比定される。

c．多重弧状文（145・192・280・331・334・337・364）

145は地文に縄文を施し、胴部の弧状沈線に区画された刻み目を添える。内面はケズリ様ナデ調整する。口縁部に沈線を巡らせその間に刻みを施す280は類胴部区画沈線下に多重弧状文が規則的に配列されている。331は縄文を沈線内に施文する一方、334は沈線文のみで施文する。337は内湾口縁を呈し内外面ともナデ調整を基調とする。器形的に浅鉢が想定される。364は有軸半弧文を描く。

d．1～3条の沈線と縄文を施文する。（72・80・111・137・138・140・146・156・333）

140は胴部がやや張り、3条沈線で施文するため堀之内1式でも古いタイプに属する。137は縄文のみ施文され、立ち上り気味の口縁よりバケツ形の器形になると思われる。156は波状口縁の貼付部分で内面に指頭圧痕が残り外面には磨消縄文を用いるなど堀之内式新相の要素をもつ。

［C類］前述の分類上、いずれにも相当しない一群を一括する。

（82・93・110・150・167・193・201・202・226・229・233・246・302・325・360）

82はやや外面に肥厚させつつ端部をまっすぐ立ち上がらせる口縁端部を有す。口縁外面に沈線とその下部に刻目を配し、胴部には浅い2条の沈線文を描く。堀之内1式か四ツ池式に併行すると考えられる。93・110は口縁部の沈線端に半裁竹管による刺突文をもつ。波頂部片の93は、縁帯文と沈線間に刺突を加え、内外面ともにミガキ様ナデで仕上げる。193は外面に格子状条線を入れ、器形的には朝顔形が想定される。大阪府縄手遺跡に類例があり、堀之内2式系統のものである。201・202は突起部が非対称な土器で口縁部内面に縄文を施文する。外面ミガキ様ナデ調整し、堀之内1式に相当する。226は注口口縁～把手部にかけての土器片で、口縁部を肥厚させた外側に把手を付ける。体部には太い沈線の刻目を有し、外面は一部煤化している。堀之内1式もしくはやや古めと思われる。229も同様であるが、胴部に近い部位に縄文を施す。233は、まっすぐ立ち上がる口縁部よりバケツ形であると思われ、胴部に多条の縦沈線を施す。ここでは半精製土器としておきたい。時期的には堀之内式・北白川式の範疇で捉えられる。246は地文に縄文をもち、波頂部に刺突を加えた後に垂下沈線を施文する。また体部に鍵手状縄文を施し、垂下沈線間にも沈線で屈曲した文様を描く。X字文の名残りが認められるため堀之内式でも古相と考えられる。167は区画沈線以下に多条の三角沈線文を施す。内面ヨコ方向の丁寧なミガキで器壁は薄い。堀之内2式系統の壺形土器と想定される。302はやや直立気味の口縁を有し、口唇部に1条の沈線を巡らせる。360は外反した後口縁部内面を肥厚させる。比較的薄いつくりで内面縁帯部に縄文を施し堀之内1式に比定される。150は文様として同心円状の磨消縄文を施す。縄文の施文法であるが、明らかに円を意識し同心円に沿って描く。内面はヨコ方向のミガキ様ナデであり、堀之内2式に比定される。325は口縁部沈線と胴部沈線間に刺突を加える。

**第Ⅴ群**　堀之内系以外の外来系とその他の特殊な要素をもつ土器を一括する。

**［A類］(68・243・244)**

北白川上層式の範疇に収まるが、他例とは相違した独自の要素をもつもの。

**243**は、内面に１条の沈線をもつ。外面は磨消縄文を基調とし、２条の沈線を横位に展開し、同心円状文で沈線末端を区画する。これらの文様形態は、北白川上層２期をモチーフとするが堀之内２式または九州地方に系譜の追えるものと思われる。**244**も同様に北白川上層２期の古いタイプと考えられるが、文様構成より九州の鐘崎式と北久根山式の中間的様相をもつものと思われる。口縁部内外面をヨコミガキ調整し、胴部は３条の沈線で入組文を描く。また、入組文は連結化している。これらの土器については、基本となる文様構成のモチーフを考えることが必要となる。

**［B類］(149・152・170・171・197・203・209・218・361)**

堀之内系以外の外来系をここにまとめる。

**149**は、外面に赤彩が認められ、四角形に磨消縄文帯を配す。器形的には、注口土器になると考えられ、北陸の縁帯紋系土器である気屋式土器でもやや古相に位置付けられることが可能と思われる。**152**は、胴部文様に太い沈線で入組釣手文を描くことから九州の鐘崎式に類似するがそのものではない。内面はミガキ様ナデ調整。**197**はやや内湾気味に仕上げる口縁部を有する小型鉢である。外面口縁部付近に２条の沈線で施文し、さらにその間を浅い刺突文で飾る。胴部にはわずかに屈曲した文様を条痕で施す。このタイプの土器は布勢式に散見される。内外面ともミガキ様ナデ調整。**209・218**は瀬戸内地方の平城式そのものである。内湾する口縁部を有し、器壁は厚く、小型の器形になると考えられる。**218**は内面に貫通孔、及び刺突をもち入組文を巡らす。外面は磨消縄文を基調とし屈曲した沈線文を施す。**213**はやや内湾気味に仕上げ、口縁端部内面に粘土を付加させて先端を丸く収める形状から瀬戸内的影響を示唆できる。器形は浅鉢形を成し内外面ともナデ調整する。類例は滋賀県仏性寺遺跡にも存在し、北白川上層２期に推定される。**361**は微波頂をもち、外面を平行磨消縄文で施文するが、この横帯文に区切り紋が加わり互いに入り組む。また、内面に沈線を有す。このような形態的特徴より加曽利Ｂ１式相当の土器と考えられるもので北白川上層３式併行であり、当遺跡内でも比較的新しい時期に位置付けられる。

**［C類］(224・287・314)**

帰属時期が不明なものをC類とする。**224**は円形補修孔を有する体部片である。住居跡１出土の**287**は中津式との関係が考えられるが横方向に展開する曲線的文様は当型式には散見されず帰属時期を決めかねる。**314**は、やや外反させた後に端部を上方へ立ち上がらせる口縁部を有すがこの土器の口縁部の作りは、端部にさらに上から粘土を付加させる。こういった形状は瀬戸内的である。また、撚りもＲ・Ｌ・Ｌと特異なものであり、時期は判別し難い。

**第Ⅵ群**

橋状把手、注口土器などを一括する。**(220・225・227・228・230・247・296・350・351)**

**225**は双並壺に取り付くと思われる把手で外面には縄文が施されている。近畿にあると思われる北白川上層式の範疇に収まるであろう。**220**は鉢の底部片と考えられ外面は縄文施文の後に底部付近に１条の沈線を巡らせ、突起状装飾を貼付している。**225**と同一個体の可能性がある。

227・228は東北の影響が考えられる橋状把手で、縄文地に沈線、刺突で施文する。南東北の綱取式、門前式と堀之内式との折衷的なモチーフであるが、再度検討を要するであろう。堀之内１式あるいはそれに併行する北白川上層１式に比定される。350は上面に刺突を有した橋状把手である。下部には刻みが施され四ツ池式に帰属すると考えられる。230は注口土器の注口である。袋状に膨らむ注口部根元が先端に向かってすぼまり口縁部付近で開く形態から北白川上層１式に比定される。住居状遺構２出土の296は口縁部に縄文を施した注口土器の注口部である。347は底部を打ち欠いた円盤状土製品である。351は貫通孔をもつ突起部である。山陰の布勢式と関東の堀之内１式との折衷的要素が見られ、芥川式併行の時期が考えられるがさらに検討の余地が残される。

３．底部

底部はその形態により平底、丸底、凹み底の３類に分類した。

**Ａ類（250～269・273・274・276・290）**

平底の一群をA類とする。そのなかにも底部両端が外方に張り出すもの（250～257）、そうでないもの（258～269・273・274・290）、体部が内湾気味に立ち上がるもの（276）などのバリエーションが認められる。内外面共に擦痕状ナデが主体的であるが削り調整（254・258）、二枚貝による条痕調整（259）も存在する。263は底部を穿孔しており、274・290は底部外面に網代痕を残している。

**Ｂ類（275）**

丸底の底部で内外面ともにナデ調整を施す。

**Ｃ類（270～272）**

凹み底の一群で272は底面が楕円形を呈する。

（青木・八重樫・松本）

（２）縄文晩期～弥生中期の土器類

縄文晩期の土器には１～9・10・11・245・422・423がある。これらは概ね長原式を中心とする型式幅で捉えられるものである。

１～９は突帯文を有する一群であり１～４は口縁部上端、５～９は頸胴部境の突帯部分が残る。内外面調整は基本的にヨコ方向のナデあるい擦痕状ナデであるが一点のみ４のような二枚貝条痕調整のものが含まれる。胎土も他の突帯文土器とは異なるものである。10・11はいずれも口縁端部を短く外方向に折り返す無文の土器片である。245は直立内傾した後に外側に肥厚させた端部の口縁形態を呈する壺である。外面の口縁端の肥厚部分と直口部との境目および頸胴部境に浅い沈線が巡り、外面調整にはヨコ方向の丁寧なミガキ調整が施される。また、内面には明瞭な粘土紐接合痕跡が残り外傾積みによる成形が看取できる。形態的な特徴より東海西部の馬見塚式に相当するものと考えられ、その他の縄文晩期土器片と同時期の範疇での位置付けが想起される。422・423は深鉢の底部である。ともに内面には削り調整が施される。422は平底で突出気味の423は窪み底で内湾する形態のものである。

弥生前期の土器は明確なものの点数は極めて少ない。377は口縁部のみの小片であるが口縁端部に刻み目、頸部にヘラ描き沈線が見られる。短く外反する口縁形態より前期の壺でも古相の特徴が認められる。

弥生中期の土器には378・379・437・444・445・456～468・475～477・501～514・526～530がある。壺等の外面に見られる櫛描文には直線文、波状文、流水文等があり、単位の細かい櫛描きとやや太いものの両者が認められる。甕では外面および内面口縁、頸部に粗いハケ調整の見られる大和形甕が主体的である。全体的には中期前葉から中葉にかけての資料に限られることがわかる。また、各遺構出土土器がほとんどその時期幅であるために、当遺跡において極めて限られた時期のみの弥生集落であることを示す根拠となっている。

378・459・468は外面に流水文を施文する一群である。378・459は広口長頸壺、468は無頸壺である。379は多条の櫛描直線文帯が巡る体部上半から頸部にかけて残る広口長頸壺の破片であるがこれも流水文になるものと思われる。櫛描直線文を主文様とするものに501・502・505・529等があるがいずれも波状文、扇形文、刻み目等を組み合わせた文様構成を示す。小片の501のみ他の壺の外面の装飾、口縁形状とは異質なものであり外来系の土器とも考えられよう。461・462・506・507・508・509・526・528の大和形甕には口縁端部に刻み目を施すものと施さないものの両者が見られるが形態的に大きな差は認められない。唯一の例であるが口縁外端面に羅状の断続的なハケ、内面に波状のともに粗いハケ目原体を使用した装飾を施す526の口縁部片が出土している。他にも口縁端の一部を棒状の原体で押圧して突出部を作り出した462のような甕も数量的には少ないが認めら

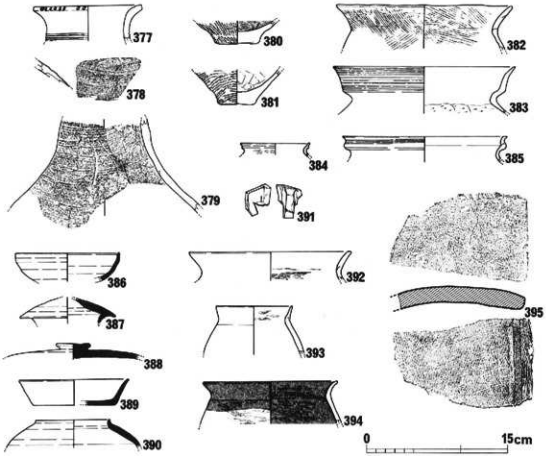



図32　出土遺物実測図17（土器類・S＝1／4）

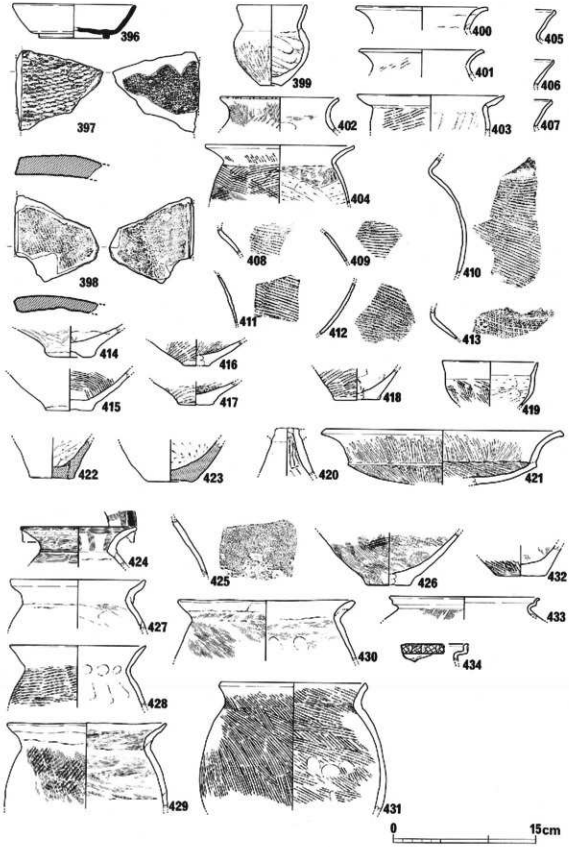



図33　出土遺物実測図18（土器類・S＝1／4）

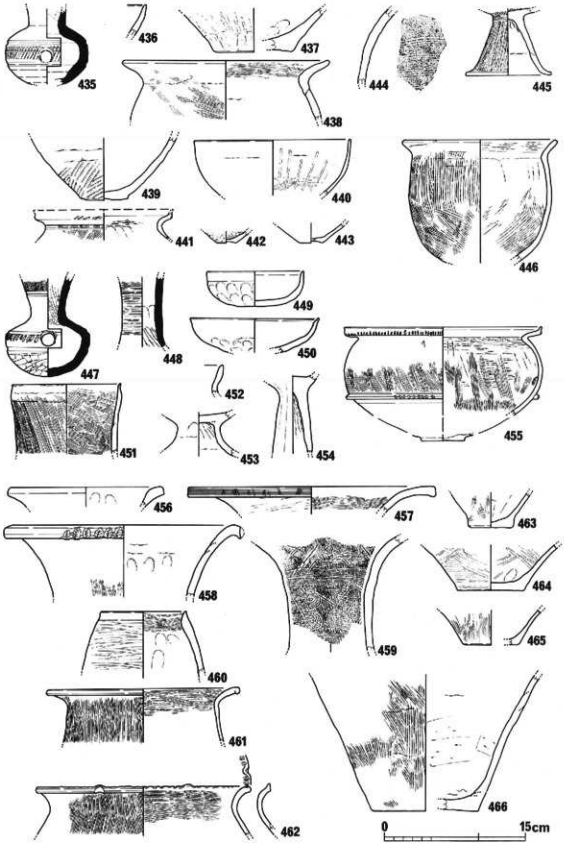



図34　出土遺物実測図19（土器類・S＝1／4）

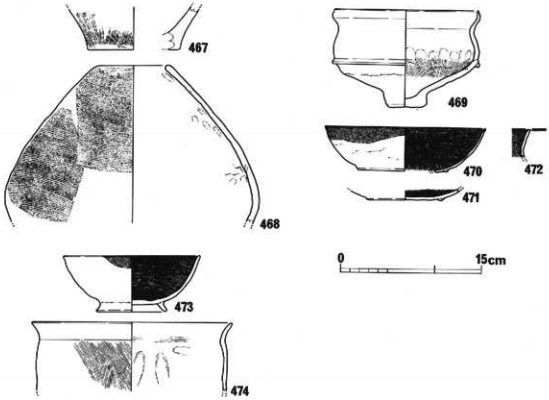



図35　出土遺物実測図20（土器類・S＝1／4）

れる。壺、甕以外の器形では529の鉢や527のような丁寧なミガキ調整の見られる取手付きの鉢がある。

（3）弥生後期～古墳前期初頭の土器類

弥生後期の土器に380・381・399～403・414～418・421・426・427・428・432・439・445・451・455・469、弥生後期末から古墳前期初頭（庄内～布留式初頭）と考えられるものに382～385・404・419・424・425・429～434・440～443・515～517・531～538がある。

弥生後期型甕には380・381・400・401・403・416・417・418・427・428・432・439の叩き調整主体の口縁部、底部がある。内面を板ナデ、ハケで調整するものが通有であり形態的には底部縮小化の顕著な416・417が時期的には新しくなるものと考えられる。外面の叩きをナデ消したやや受け口気味の口縁端部をもつ427や外反、水平気味に外側に開く口縁の400～403等の形態は弥生後期の範疇に位置付けられるものである。内面を削る庄内系の甕では404と405～407の端部のつまみ上げの顕著な口縁部小片と408～412の左上がり細筋叩きの典型的大和型甕、515・532・537の極細叩きで内面肥厚の口縁端を呈する庄内甕の模倣形態等が見られる。布留系もしくは布留式甕には古式の様相を示すものが多く533～536のように外面肩部の横ハケと内湾した後に小さく肥厚させる口縁端部の形状が特徴的である。これら以外の甕には429・430・431・438に見られる単純口縁で外面を叩き後ハケあるいはハケのみで調整するものがあるが、外来系もしくは弥生後期型甕の変容形態として考えられよう。

その他の器形を見ると、長頸壺399・451、高坏420・421のように器形的にも弥生後期の時期に特定できるものや445の高坏脚部の形態より後期初頭にまで時期的に遡る土器もわずかに認められる。内面削りの小型鉢419は庄内期に特有の器形であり、手焙り形土器の覆い部分538についても弥生後期末から庄内期に比定できよう。また、内外面に細かいヨコミガキを多用する直線的な坏部口縁の精製高坏は布留式の指標となる。

外来系土器には伊勢湾沿岸地域を含む東海系、湖北を含む近江系、北陸系など当遺跡の東方、東北方向の地域圏より直接的に搬入されたものが多く出土している。櫛描文を多用した装飾を施す壺424・425は伊勢湾沿岸から湖東、濃尾平野の範囲に見られるものに類似する。粗雑な作りの口縁部と胎土、内外面のハケ等の特徴的な甕382は近江北部のいわゆる長浜甕とされるものと思われる。近江系の土器は湖東地域より搬入された受け口口縁甕が主体となる。385は口縁外端に二条

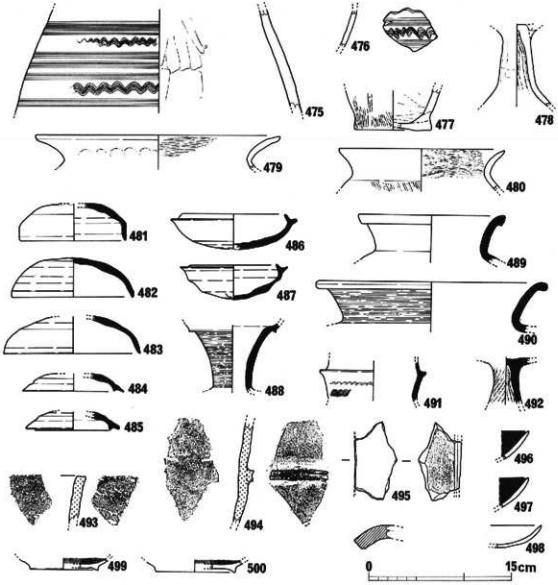



図36　出土遺物実測図21（土器類・S＝1／4）

の沈線が巡り、434は斜格子状に櫛描き線を施す外端面に縦位の棒状浮文を貼り付けている。441は口縁外端面に列点文、外面頸部に沈線を巡らす。442・443の底部は窪み底を呈し典型的な近江系の特徴を示すものである。その他にも受け口口縁の鉢455・469があるが底部の突出、平底であることや受け部の立ち上がりの形状等の特徴から典型的な近江系とは言い難いものである。近江周辺部あるいは近江系の影響による変容形態と考えておきたい。

（4）古墳中・後期以降の土器類

古墳中期頃の土器の出土は少なく当該時期の遺構も検出されていない。後期以降では須恵器に

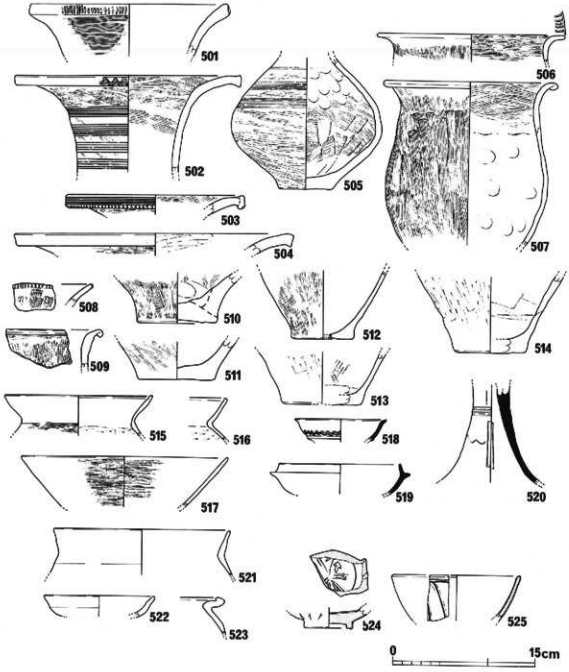



図37　出土遺物実測図22（土器類・S＝1／4）

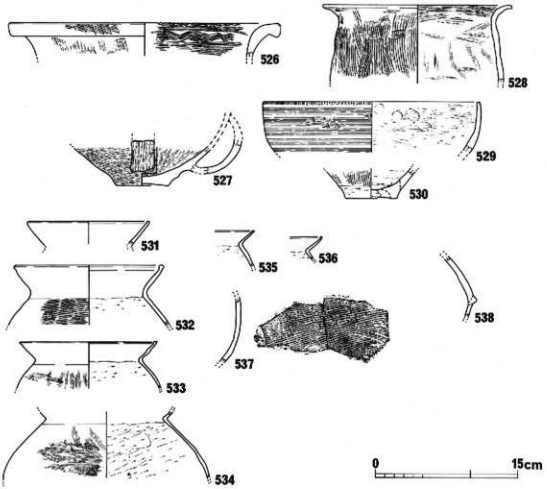



図38　出土遺物実測図23（土器類・S＝1／4）

386～391・396・435・447・448・481～492・498・518～520等があり、6世紀後半代から8・9世紀の奈良・平安前期頃の時期幅の各器種が出土しているがいずれも小片である場合が多い。特殊なものに391の円面硯の透しを多用する脚部小片がある。土師器では392・393・449・450・452～454・474・479・480・498・521・522・523がある。498・522・523の中世後期に帰属する土師質小皿と羽釜を除き主体となるのは奈良・平安前期の土器である。また、同時期幅の範疇に属するものに黒色土器394・470～473・496・497・499・500があり、いずれも内面黒色のA類が全体出土点数の多くを占める。中世土器類では前期の土師質土器のほかにも、図示しなかったが12～13世紀頃の瓦器の出土が見られる。また、中国・龍泉窯系の輸入陶磁器525・525が少ないながらも出土している。

（5）埴輪類

493・494のような須恵質埴輪の破片がある。一次調整のタテハケのみが明瞭なものでありいずれも6世紀後半代のものであろう。

（6）瓦類

395・397・398・495の凸面にナデあるいはコビキ痕、凹面に布目痕を残す平瓦、丸瓦等があるが瓦当面の残るものは出土していない。

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 灰黄褐色 | C | c | 11C区第Ⅳ層 |
| 2 | 黄灰色 | A | b | NR401 |
| 3 | にぶい黄橙色 | B | c | NR402S |
| 4 | 灰黄褐色 | B | b | NR402S |
| 5 | 褐灰色 | B | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 6 | にぶい黄橙色 | A | a | 10E区第Ⅳ層 |
| 7 | にぶい黄橙色 | C | b | NR402S |
| 8 | にぶい黄橙色 | A | a | NR402S |
| 9 | にぶい黄橙色 | B | d | NR402S |
| 10 | にぶい褐色 | C | c | NR402S |
| 11 | にぶい褐色 | A | c | NR402S |
| 12 | 灰黄褐色 | A | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 13 | 黄灰色 | C | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 14 | 褐灰色 | A | a | 7F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 15 | 褐灰色 | B | a | 8F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 16 | にぶい黄橙色 | B | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 17 | 褐灰色 | A | b | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 18 | 明赤褐色 | B | a | NR402W |
| 19 | 灰黄褐色 | C | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 20 | にぶい黄橙色 | B | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 21 | にぶい黄橙色 | B | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 22 | 灰白色 | C | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 23 | 橙色 | C | b | NR402W |
| 24 | にぶい黄橙色 | C | c | NR402W |
| 25 | にぶい褐色 | B | b | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 26 | にぶい黄橙色 | B | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 27 | 褐灰色 | A | b | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 28 | にぶい褐色 | B | c | 7・8F区第Ⅳ層 |
| 29 | 灰褐色 | C | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 30 | 褐灰色 | B | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 31 | にぶい橙色 | A | a | 8E・F区第Ⅳ層 |
| 32 | にぶい褐色 | B | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 33 | 橙色 | C | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 34 | 灰色 | C | b | NR402S |
| 35 | 褐灰色 | B | a | 7F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 36 | 明褐灰色 | D | c | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 37 | 褐灰色 | B | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 38 | にぶい橙色 | C | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 39 | 暗灰黄色 | B | a | 7E区第Ⅳ層 |
| 40 | にぶい黄橙色 | C | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 41 | 灰黄色 | B | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 42 | にぶい黄橙色 | B | d | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 43 | 黄灰色 | C | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 44 | 褐灰色 | B | c | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 45 | 灰黄褐色 | A | a | 8F区第Ⅳ層 |
| 46 | にぶい黄褐色 | C | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 47 | 褐灰色 | C | c | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 48 | 褐灰色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 49 | 灰褐色 | B | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 50 | 黄色 | C | a | 第Ⅳ・Ⅴ層 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 51 | 橙色 | B | b | 5B区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 52 | にぶい赤褐色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 53 | にぶい橙色 | C | c | 5D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 54 | 暗灰黄色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 55 | 灰褐色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 56 | にぶい橙色 | A | a | 8F区第Ⅳ層 |
| 57 | 浅黄色 | B | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 58 | にぶい黄橙色 | B | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 59 | 灰黄褐色 | C | b | 8C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 60 | 灰黄褐色 | C | d | 8C区第Ⅳ層 |
| 61 | にぶい黄橙色 | C | c | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 62 | にぶい黄橙色 | C | c | 7・8D区第Ⅳ層 |
| 63 | にぶい黄橙色 | A | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 64 | にぶい黄褐色 | C | c | 10C区第Ⅳ層 |
| 65 | 灰白色 | B | c | 9C区第Ⅳ層 |
| 66 | にぶい黄色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 67 | 灰黄褐色 | B | a | 8F区第Ⅳ層 |
| 68 | にぶい褐色 | B | c | 5C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 69 | にぶい黄橙色 | A | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 70 | にぶい黄橙色 | A | a | 8F区第Ⅳ層 |
| 71 | 褐灰色 | C | c | NR402W |
| 72 | 褐灰色 | C | d | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 73 | にぶい黄橙色 | C | c | 9D区第Ⅳ層 |
| 74 | にぶい黄橙色 | B | c | 7D区第Ⅳ層 |
| 75 | にぶい黄橙色 | C | b | 6C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 76 | 黄灰色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 77 | 褐灰色 | B | c | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 78 | 浅黄橙色 | B | c | 10C区第Ⅳ層 |
| 79 | 灰黄色 | A | a | 7E区第Ⅳ層 |
| 80 | にぶい黄橙色 | A | c | 7E区第Ⅳ層 |
| 81 | にぶい黄橙色 | B | c | 6E・F区第Ⅳ層 |
| 82 | にぶい褐色 | C | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 83 | にぶい黄色 | B | b | 6E・F区第Ⅳ層 |
| 84 | にぶい黄褐色 | C | c | 11E区第Ⅳ層 |
| 85 | 浅黄橙色 | B | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 86 | にぶい黄橙色 | B | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 87 | 灰黄色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 88 | 褐灰色 | B | c | 9C区第Ⅳ層 |
| 89 | 橙色 | C | c | 9C区第Ⅳ層 |
| 90 | にぶい黄橙色 | C | b | 6F区第Ⅴ層 |
| 91 | 黒褐色 | B | c | 7F区第Ⅳ層 |
| 92 | 灰褐色 | C | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 93 | にぶい黄橙色 | A | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 94 | 灰黄色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 95 | 褐灰色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 96 | にぶい黄褐色 | A | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 97 | 黄灰色 | A | a | 7E区第Ⅳ層 |
| 98 | 褐灰色 | C | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 99 | 灰黄色 | A | a | 7E区第Ⅳ層 |
| 100 | 灰黄褐色 | B | b | 7E区第Ⅳ層 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 101 | 灰黄色 | A | b | 7E区第Ⅳ層 |
| 102 | にぶい橙色 | C | d | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 103 | 褐灰色 | B | a | 8F区第Ⅳ層 |
| 104 | にぶい黄橙色 | C | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 105 | 浅黄橙色 | C | d | 7・8D区第Ⅳ層 |
| 106 | 褐灰色 | A | a | 7F区第Ⅳ層 |
| 107 | にぶい黄橙色 | A | a | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 108 | 灰褐色 | B | a | 8C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 109 | 黄灰色 | A | b | 9C区第Ⅳ層 |
| 110 | にぶい黄橙色 | A | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 111 | にぶい黄橙色 | B | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 112 | 灰黄色 | C | c | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 113 | にぶい橙色 | C | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 114 | にぶい黄橙色 | B | c | 7E区第Ⅳ層 |
| 115 | 褐灰色 | C | c | 9A区第Ⅳ層 |
| 116 | 褐灰色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 117 | 褐灰色 | C | a | 6C区第Ⅴ層 |
| 118 | 褐灰色 | A | a | 7F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 119 | にぶい橙色 | C | d | 10C区第Ⅳ層 |
| 120 | 灰黄褐色 | B | b | 10D区第Ⅳ層 |
| 121 | 橙色 | C | c | 7D区第Ⅳ層 |
| 122 | 浅黄色 | B | c | 7D区第Ⅳ層 |
| 123 | にぶい黄橙色 | C | c | 5C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 124 | 浅黄色 | B | b | 8C区第Ⅳ層 |
| 125 | にぶい黄橙色 | A | a | 9D区第Ⅳ層 |
| 126 | 浅黄橙色 | B | c | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 127 | 灰白色 | B | a | 9C区第Ⅳ層 |
| 128 | 橙色 | C | c | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 129 | にぶい橙色 | C | b | 8C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 130 | 浅黄橙色 | B | c | 7D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 131 | 浅黄色 | B | a | 7F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 132 | にぶい黄橙色 | B | b | 10D区第Ⅳ層 |
| 133 | にぶい黄橙色 | A | a | 7E区第Ⅳ層 |
| 134 | にぶい黄橙色 | A | b | 第Ⅳ層 |
| 135 | 浅黄橙色 | A | a | 6D区第Ⅲ層 |
| 136 | 灰黄褐色 | C | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 137 | 黄灰色 | A | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 138 | 浅黄橙色 | B | a | 10D区第Ⅳ層 |
| 139 | にぶい黄橙色 | B | b | 7D区第Ⅳ層 |
| 140 | にぶい黄橙色 | B | d | 8C区第Ⅳ層 |
| 141 | にぶい橙色 | C | d | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 142 | 褐灰色 | B | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 143 | にぶい橙色 | C | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 144 | 明黄褐色 | A | a | NR402W |
| 145 | 灰黄褐色 | B | b | 8B区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 146 | にぶい橙色 | B | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 147 | 橙色 | C | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 148 | 褐灰色 | B | b | 8E・F区第Ⅴ層 |
| 149 | 褐灰色 | B | b | 8E・F区第Ⅴ層 |
| 150 | にぶい橙色 | B | b | 7D区第Ⅳ層 |
| 151 | にぶい黄色 | B | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 152 | 褐灰色 | C | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 153 | 灰褐色 | B | b | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 154 | 灰褐色 | B | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 155 | 褐灰色 | A | b | 5B区第Ⅳ層 |
| 156 | 橙色 | B | b | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 157 | 灰黄褐色 | B | b | 10D区第Ⅳ層 |
| 158 | にぶい黄橙色 | B | b | 6A区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 159 | 灰褐色 | B | c | 5D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 160 | 灰白色 | B | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 161 | 灰黄褐色 | B | c | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 162 | 黄灰色 | A | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 163 | 褐灰色 | A | a | NR402S深掘部分 |
| 164 | にぶい橙色 | B | a | 7C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 165 | 褐灰色 | B | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 166 | にぶい黄橙色 | B | b | 8C区第Ⅳ層 |
| 167 | 灰白色 | B | b | 9・10D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 168 | にぶい黄橙色 | B | b | 第Ⅳ層 |
| 169 | にぶい橙色 | C | c | 第Ⅳ層 |
| 170 | 橙色 | D | c | 6F区第Ⅴ層 |
| 171 | 灰褐色 | B | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 172 | 灰褐色 | C | c | 5D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 173 | 灰黄褐色 | B | b | 6F区第Ⅴ層 |
| 174 | 灰黄橙色 | B | a | 8A区第Ⅳ層 |
| 175 | 明褐灰色 | A | a | 6E区第Ⅲ層 |
| 176 | 灰黄褐色 | B | b | 8C区第Ⅳ層 |
| 177 | 灰黄褐色 | B | b | 8C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 178 | にぶい黄橙色 | A | c | 第Ⅳ層 |
| 179 | 灰白色 | C | c | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 180 | 浅黄橙色 | B | a | 10D区第Ⅳ層 |
| 181 | にぶい黄橙色 | B | c | 10C区第Ⅳ層 |
| 182 | にぶい黄橙色 | C | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 183 | 灰黄褐色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 184 | にぶい褐色 | B | d | 7C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 185 | 灰黄褐色 | B | c | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 186 | にぶい橙色 | B | c | 7F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 187 | 灰黄褐色 | B | b | 7F区第Ⅳ層 |
| 188 | 灰黄褐色 | B | b | 7E区第Ⅳ層 |
| 189 | 褐灰色 | B | b | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 190 | にぶい褐色 | A | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 191 | にぶい黄橙色 | B | b | 10C区第Ⅴ層 |
| 192 | 灰白色 | B | a | 第Ⅳ層 |
| 193 | にぶい黄橙色 | B | a | 第Ⅳ層 |
| 194 | にぶい黄橙色 | B | c | NR402W |
| 195 | にぶい橙色 | A | c | 8C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 196 | 黄灰色 | C | c | 10C区第Ⅳ層 |
| 197 | 灰黄褐色 | A | a | 7F区第Ⅳ層 |
| 198 | 黄灰色 | A | c | 7F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 199 | にぶい黄橙色 | B | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 200 | 灰色 | A | b | 7E区第Ⅳ層 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 201 | 褐灰色 | A | a | 第Ⅳ層 |
| 202 | にぶい橙色 | B | a | 第Ⅳ層 |
| 203 | 灰白色 | C | b | 6F区第Ⅴ層 |
| 204 | にぶい黄橙色 | C | b | 10D区第Ⅳ層 |
| 205 | にぶい黄橙色 | A | b | 第Ⅳ層 |
| 206 | にぶい橙色 | B | a | 7D区第Ⅳ層 |
| 207 | 褐灰色 | C | c | 7D区第Ⅳ層 |
| 208 | にぶい橙色 | C | b | NR401W |
| 209 | 褐灰色 | A | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 210 | 淡黄色 | B | b | 11E区第Ⅳ層 |
| 211 | にぶい黄橙色 | C | c | 11E区第Ⅳ層 |
| 212 | にぶい褐色 | B | c | 9A区第Ⅳ層 |
| 213 | 淡橙色 | C | b | 6E区第Ⅳ層 |
| 214 | 灰黄褐色 | C | b | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 215 | 褐灰色 | B | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 216 | 灰黄褐色 | C | b | 8A区第Ⅳ層 |
| 217 | にぶい黄橙色 | B | c | 9C区第Ⅳ層 |
| 218 | 褐灰色 | A | a | 第Ⅳ層 |
| 219 | にぶい橙色 | C | c | 7B区第Ⅳ層 |
| 220 | 黄灰色 | B | b | NR401W |
| 221 | 橙色 | C | b | 8A区第Ⅳ層 |
| 222 | にぶい褐色 | A | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 223 | 灰白色 | C | b | 8E・F区第Ⅴ層 |
| 224 | にぶい黄橙色 | B | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 225 | 黄灰色 | A | b | 6F区第Ⅴ層 |
| 226 | 橙色 | B | b | 7D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 227 | にぶい黄橙色 | C | c | 第Ⅳ層 |
| 228 | にぶい黄橙色 | B | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 229 | 灰白色 | B | c | 7D区第Ⅳ層 |
| 230 | 灰白色 | B | b | 6F区第Ⅴ層 |
| 231 | にぶい橙色 | B | b | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 232 | 淡黄色 | A | b | 第Ⅳ層 |
| 233 | 灰黄色 | A | c | 7F区第Ⅳ層 |
| 234 | 灰褐色 | B | a | 8C区第Ⅳ層 |
| 235 | 橙色 | C | c | NR401W |
| 236 | にぶい黄橙色 | A | a | 第Ⅳ層 |
| 237 | にぶい黄橙色 | B | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 238 | 灰白色 | B | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 239 | にぶい黄橙色 | C | c | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 240 | にぶい黄橙色 | B | b | 6A区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 241 | 褐灰色 | C | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 242 | 褐灰色 | C | b | 8C区第Ⅳ層 |
| 243 | にぶい黄橙色 | B | c | 第Ⅳ層 |
| 244 | 黄灰色 | B | b | NR402W |
| 245 | 灰白色 | B | b | 10C区第Ⅳ層 |
| 246 | 褐灰色 | C | c | 9C区第Ⅳ層 |
| 247 | 黄灰色 | A | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 248 | 浅黄色 | B | b | 8F区第Ⅳ層 |
| 249 | 黄灰色 | A | a | 7E・F区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 250 | 明褐灰色 | C | b | 6F区第Ⅴ層 |
| 251 | にぶい黄橙色 | B | c | 第Ⅳ層 |
| 252 | 淡黄色 | C | b | 8C区第Ⅳ層 |
| 253 | 灰黄色 | D | c | 10B区第Ⅳ層 |
| 254 | 橙色 | B | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 255 | にぶい黄橙色 | C | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 256 | 褐灰色 | C | b | 8B区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 257 | 灰黄色 | D | c | 10D区第Ⅳ層 |
| 258 | にぶい橙色 | C | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 259 | 橙色 | C | b | 8B区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 260 | 浅黄橙色 | C | d | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 261 | 橙色 | C | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 262 | 橙色 | B | b | 8E区第Ⅳ層 |
| 263 | 灰黄色 | A | a | 7E区第Ⅳ層 |
| 264 | 灰白色 | B | a | 8E区第Ⅳ層 |
| 265 | 灰白色 | C | c | 8C区第Ⅳ層 |
| 266 | 浅黄橙色 | B | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 267 | にぶい黄橙色 | D | c | 10D区第Ⅳ層 |
| 268 | 灰白色 | B | c | 8F区第Ⅳ層 |
| 269 | にぶい黄橙色 | A | b | 第Ⅳ層 |
| 270 | にぶい橙色 | C | b | 8D区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 271 | にぶい黄褐色 | B | c | 8E区第Ⅳ層 |
| 272 | 褐灰色 | C | c | 6F区第Ⅴ層 |
| 273 | 褐灰色 | C | c | 7E区第Ⅳ層 |
| 274 | 灰黄色 | C | c | 8C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 275 | 淡黄色 | C | b | 9B区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 276 | 黄灰色 | B | b | 7E区第Ⅳ層 |
| 277 | にぶい橙色 | B | c | 堰遺構1 |
| 278 | にぶい黄橙色 | B | b | 堰遺構1 |
| 279 | にぶい橙色 | C | b | SD401 |
| 280 | 浅黄色 | A | b | 7E区第Ⅳ層 |
| 281 | 黄灰色 | C | b | 堰遺構3 |
| 282 | にぶい黄橙色 | C | b | 堰遺構2 |
| 283 | 灰黄褐色 | B | b | 堰遺構2 |
| 284 | 黒褐色 | B | b | SX401 |
| 285 | 灰黄色 | A | b | 住居状遺構1 |
| 286 | 黒褐色 | B | c | 住居状遺構1 |
| 287 | にぶい黄橙色 | B | d | 住居状遺構1 |
| 288 | 浅黄橙色 | B | b | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 289 | にぶい黄色 | B | b | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 290 | 淡黄色 | B | c | 住居状遺構1 |
| 291 | 黄灰色 | C | a | NR402W |
| 292 | 黒褐色 | B | a | 住居状遺構2 |
| 293 | 灰白色 | A | b | 住居状遺構2柱穴19 |
| 294 | 黄橙色 | A | b | 住居状遺構2 |
| 295 | 褐灰色 | B | a | 住居状遺構2 |
| 296 | にぶい黄褐色 | A | a | 住居状遺構2柱穴19 |
| 297 | 橙色 | B | b | 6－8C区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 298 | 灰黄褐色 | A | c | 6H区第Ⅲ層 |
| 299 | 明赤褐色 | A | a | 6H区第Ⅲ層 |
| 300 | 橙色 | B | b | 第Ⅳ・Ⅴ層 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 301 | にぶい黄橙色 | B | b | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 302 | にぶい黄褐色 | A | a | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 303 | 橙色 | B | b | 4I区第Ⅲ層 |
| 304 | 赤橙色 | C | d | 6G区第Ⅲ層 |
| 305 | 灰褐色 | C | d | 6H区第Ⅲ層 |
| 306 | にぶい黄橙色 | C | a | 6G区第Ⅲ層 |
| 307 | にぶい黄橙色 | B | b | 6H区第Ⅲ層 |
| 308 | 浅黄色 | B | a | 6H区第Ⅲ層 |
| 309 | にぶい黄色 | A | b | 4G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 310 | にぶい褐色 | B | b | 5･6G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 311 | 浅黄橙色 | B | a | 5･6G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 312 | 暗灰黄色 | A | a | 4～6K試掘トレンチ排土 |
| 313 | 黄褐色 | A | a | 4～6K試掘トレンチ排土 |
| 314 | にぶい黄褐色 | C | d | 6G区第Ⅲ層 |
| 315 | 浅黄橙色 | B | b | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 316 | 浅黄色 | A | a | 4I区第Ⅲ層 |
| 317 | にぶい橙色 | B | b | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 318 | 灰褐色 | C | d | 6H区第Ⅲ層 |
| 319 | 黒褐色 | C | c | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 320 | 黄灰色 | A | a | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 321 | にぶい褐色 | B | c | 第Ⅳ層 |
| 322 | にぶい黄橙色 | C | c | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 323 | 灰黄褐色 | A | a | 6H区第Ⅲ層 |
| 324 | 褐灰色 | A | a | 6H区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 325 | 橙色 | A | a | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 326 | 浅黄橙色 | C | c | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 327 | にぶい橙色 | A | a | 6H区第Ⅲ層 |
| 328 | 黒色 | A | a | 6H区第Ⅲ層 |
| 329 | 灰黄褐色 | C | b | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 330 | 灰色 | B | b | 5G区第Ⅲ層 |
| 331 | にぶい黄色 | A | a | 6H区第Ⅲ層 |
| 332 | 褐灰色 | B | b | 6G区第Ⅲ層 |
| 333 | にぶい黄橙色 | B | a | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 334 | 灰色 | A | b | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 335 | 浅黄橙色 | C | c | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 336 | にぶい黄褐色 | B | c | 6G区第Ⅲ層 |
| 337 | にぶい黄橙色 | B | c | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 338 | にぶい黄橙色 | B | b | 6G区第Ⅲ層 |
| 339 | にぶい黄褐色 | B | d | 6H区第Ⅲ層 |
| 340 | 黒褐色 | A | b | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 341 | 灰黄褐色 | A | a | 6H区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 342 | 灰黄褐色 | B | b | 6H区第Ⅲ層 |
| 343 | オリーブ黒色 | C | b | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 344 | にぶい黄褐色 | A | b | 6G区第Ⅲ層 |
| 345 | 黄褐色 | B | a | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 346 | 灰黄褐色 | A | a | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 347 | にぶい黄褐色 | A | a | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 348 | 灰黄色 | A | a | 5・6G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 349 | にぶい橙色 | B | c | 6H区第Ⅲ層 |
| 350 | にぶい黄色 | D | c | 6G区第Ⅲ層 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 351 | にぶい黄色 | B | c | 6G区第Ⅲ層 |
| 352 | 浅黄橙色 | C | c | 1A区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 353 | 褐灰色 | B | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 354 | 橙色 | C | c | 1A区第Ⅳ層 |
| 355 | にぶい黄褐色 | B | c | 3B区第Ⅳ層 |
| 356 | にぶい黄橙色 | A | b | 1B区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 357 | にぶい黄橙色 | A | a | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 358 | にぶい黄橙色 | C | c | SD401 |
| 359 | にぶい橙色 | B | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 360 | にぶい黄橙色 | B | b | SD401 |
| 361 | にぶい橙色 | B | a | 4B区第Ⅳ層 |
| 362 | 黒褐色 | D | b | 4B区第Ⅳ層 |
| 363 | にぶい黄橙色 | C | c | SD401 |
| 364 | にぶい黄橙色 | B | b | 4B区第Ⅳ層 |
| 365 | 浅黄橙色 | B | b | 4B区第Ⅳ層 |
| 366 | にぶい黄橙色 | B | c | 4B区第Ⅳ層 |
| 367 | 浅黄橙色 | C | c | 4B区第Ⅳ層 |
| 368 | にぶい黄褐色 | B | b | 2B区第Ⅳ層上面素掘り溝 |
| 369 | にぶい黄橙色 | A | b | 3A区第Ⅳ層 |
| 370 | にぶい黄橙色 | B | a | 3A区第Ⅳ層 |
| 371 | 灰黄褐色 | A | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 372 | にぶい橙色 | A | b | 4B区第Ⅳ層 |
| 373 | にぶい黄橙色 | A | a | 第Ⅳ層 |
| 374 | にぶい褐色 | B | b | 1A区第Ⅳ層 |
| 375 | にぶい褐色 | B | b | 第Ⅳ層 |
| 376 | にぶい黄橙色 | B | b | 2A区第Ⅳ層 |
| 377 | 明褐灰色 | B | a | 7C区第Ⅲ層 |
| 378 | にぶい黄橙色 | B | a | 8C区第Ⅲ層 |
| 379 | 灰白色 | B | c | 5C区第Ⅲ層 |
| 380 | にぶい黄橙色 | A | a | 8D区第Ⅲ層 |
| 381 | 灰黄色 | B | a | 7C区第Ⅲ層 |
| 382 | 浅黄橙色 | A | a | 10C区第Ⅳ層 |
| 383 | にぶい黄橙色 | A | c | 11B区第Ⅳ層 |
| 384 | 灰黄褐色 | A | a | 7E区第Ⅲ層 |
| 385 | 浅黄橙色 | B | a | 10D区第Ⅳ層 |
| 386 | 灰色 | A | a | 5D区第Ⅲ層 |
| 387 | 灰色 | A | a | 5D区第Ⅲ層 |
| 388 | 灰白色 | A | a | 5F区第Ⅲ層 |
| 389 | 黄灰色 | A | a | 9C区第Ⅲ層 |
| 390 | 灰色 | A | a | 5F区第Ⅲ層 |
| 391 | 灰色 | A | a | 5C区第Ⅲ層 |
| 392 | 浅黄橙色 | A | a | 10C区第Ⅳ層 |
| 393 | 赤橙色 | A | c | 5F区第Ⅲ層 |
| 394 | にぶい褐色 | B | a | 9D区第Ⅲ層 |
| 395 | 褐灰色 | A | b | 5E区第Ⅲ層 |
| 396 | 灰白色 | A | a | 7F区第Ⅲ層 |
| 397 | にぶい黄橙色 | B | c | 9F区第Ⅲ層 |
| 398 | 灰色 | A | a | 7E区第Ⅲ層 |
| 399 | 灰白色 | B | c | 11A区第Ⅳ層 |
| 400 | にぶい黄橙色 | A | a | 9F区第Ⅲ層 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 401 | 灰白色 | A | a | 5F区第Ⅲ層 |
| 402 | 灰色 | B | b | 9E区第Ⅳ層 |
| 403 | 灰黄褐色 | A | a | 11C区第Ⅳ層 |
| 404 | にぶい黄褐色 | A | b | 11A区第Ⅳ層 |
| 405 | にぶい黄褐色 | A | a | 12B区第Ⅳ層 |
| 406 | にぶい黄橙色 | A | b | 11A区第Ⅳ層 |
| 407 | にぶい黄橙色 | A | b | 11B区第Ⅳ層 |
| 408 | にぶい黄橙色 | A | a | 11A区第Ⅳ層 |
| 409 | にぶい黄橙色 | A | a | 11A区第Ⅳ層 |
| 410 | 灰白色 | A | a | 11A区第Ⅳ層 |
| 411 | 灰白色 | A | a | 11B区第Ⅳ層 |
| 412 | 褐灰色 | A | b | 11A区第Ⅳ層 |
| 413 | 灰黄褐色 | B | a | 11A区第Ⅳ層 |
| 414 | にぶい黄橙色 | A | a | 9F区第Ⅳ層 |
| 415 | 灰色 | A | a | 9E区第Ⅳ層 |
| 416 | 灰黄褐色 | A | a | 9F区第Ⅳ層 |
| 417 | にぶい黄橙色 | A | a | 9E区第Ⅳ層 |
| 418 | 灰黄褐色 | B | a | 9E区第Ⅳ層 |
| 419 | 灰褐色 | A | c | 11A区第Ⅳ層 |
| 420 | にぶい黄橙色 | A | c | 9E区第Ⅳ層 |
| 421 | にぶい黄橙色 | A | b | 11B区第Ⅳ層 |
| 422 | にぶい黄橙色 | A | a | 11B区第Ⅳ層 |
| 423 | 灰黄褐色 | B | b | 11B区第Ⅳ層 |
| 424 | にぶい黄橙色 | A | b | NR402W |
| 425 | にぶい黄橙色 | A | b | NR402W |
| 426 | 灰黄褐色 | B | b | NR402W |
| 427 | にぶい黄橙色 | B | b | NR402W |
| 428 | 灰黄褐色 | A | b | NR402W |
| 429 | 灰黄褐色 | B | b | NR402W |
| 430 | にぶい橙色 | A | c | NR402W |
| 431 | にぶい褐色 | B | b | NR402W |
| 432 | にぶい黄橙色 | A | b | NR402W |
| 433 | にぶい黄橙色 | A | a | NR402W |
| 434 | 浅黄橙色 | B | b | NR402W |
| 435 | 灰色 | A | a | NR402S |
| 436 | にぶい黄橙色 | A | b | NR402S |
| 437 | にぶい黄橙色 | C | b | NR402S |
| 438 | にぶい黄橙色 | A | b | NR402S |
| 439 | 灰黄褐色 | C | d | NR402S |
| 440 | 灰黄色 | A | a | NR402S |
| 441 | にぶい黄橙色 | A | a | NR402S |
| 442 | にぶい橙色 | A | b | NR402S |
| 443 | にぶい橙色 | C | c | NR402S |
| 444 | にぶい褐色 | B | c | NR401 |
| 445 | にぶい黄橙色 | A | a | NR401 |
| 446 | 浅黄橙色 | A | a | SD403 |
| 447 | 青灰色 | C | a | SD401 |
| 448 | 灰色 | A | a | SD401 |
| 449 | 橙色 | B | c | 5E区第Ⅲ層 |
| 450 | 橙色 | A | b | SD401 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 451 | 橙色 | A | c | SD401 |
| 452 | 橙色 | A | c | SD401 |
| 453 | 橙色 | A | b | SD401 |
| 454 | 橙色 | B | c | SD401 |
| 455 | 黄橙色 | A | a | SD401 |
| 456 | 褐灰色 | B | c | SD402 |
| 457 | にぶい黄橙色 | B | a | 6C区第Ⅲ層 |
| 458 | 褐灰色 | B | b | SD402 |
| 459 | にぶい褐色 | B | b | SD402上部 |
| 460 | 淡黄色 | A | a | SD402 |
| 461 | 黄灰色 | A | a | SD402上層 |
| 462 | にぶい黄橙色 | A | b | SD402上層 |
| 463 | 灰黄色 | B | b | SD402上層 |
| 464 | にぶい橙色 | A | b | SD402 |
| 465 | 灰黄色 | C | b | SD402下層 |
| 466 | にぶい黄橙色 | C | b | SD402 |
| 467 | 浅黄橙色 | C | b | SK401 |
| 468 | 橙色 | C | b | SK401 |
| 469 | 褐灰色 | B | b | SK302 |
| 470 | にぶい黄橙色 | B | a | SE302下層 |
| 471 | 橙色 | B | b | SE302下層 |
| 472 | 淡黄橙色 | C | b | SE302下層 |
| 473 | 淡黄色 | A | a | SK301 |
| 474 | にぶい黄橙色 | A | b | SK301 |
| 475 | 灰黄色 | A | a | 第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 476 | 褐色 | B | a | 6G区第Ⅲ層 |
| 477 | にぶい褐色 | B | b | 5G区第Ⅲ層 |
| 478 | 橙色 | B | b | 4G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 479 | 浅黄色 | A | a | 第Ⅳ層 |
| 480 | にぶい橙色 | A | b | 5G区第Ⅲ層 |
| 481 | 灰色 | A | a | 5G区流路 |
| 482 | 灰色 | A | b | 4G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 483 | 灰白色 | A | a | 6H区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 484 | 灰色 | A | a | 5G区第Ⅲ層 |
| 485 | 青灰色 | A | a | 6H区第Ⅲ層 |
| 486 | 灰色 | A | a | 6A区第Ⅲ層 |
| 487 | 灰黄色 | A | a | 4G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 488 | 灰色 | A | a | 4I区第Ⅲ層 |
| 489 | 灰色 | A | a | 4I区第Ⅲ層 |
| 490 | オリーブ灰色 | A | a | 5I区第Ⅲ層 |
| 491 | 灰色 | A | a | 6H区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 492 | 灰色 | A | a | 6～8G区第Ⅳ・Ⅴ層 |
| 493 | 灰色 | A | a | 5L区第Ⅲ層 |
| 494 | 橙色 | B | a | 5I区第Ⅲ層 |
| 495 | 灰色 | B | a | 5G区第Ⅲ層 |
| 496 | にぶい黄橙色 | A | a | 5・6G区排土 |
| 497 | 灰黄色 | A | a | 5・6G区排土 |
| 498 | 橙色 | A | c | 6G区第Ⅲ層 |
| 499 | にぶい黄橙色 | A | a | 5・6G区排土 |
| 500 | 灰黄褐色 | A | a | 5・6G区排土 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 501 | 灰色 | A | a | 5B区第Ⅳ層 |
| 502 | にぶい褐色 | B | b | 1A区第Ⅳ層 |
| 503 | 浅黄橙色 | C | b | 第Ⅱ・Ⅲ層 |
| 504 | 灰褐色 | A | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 505 | 灰白色 | A | a | 3B区第Ⅳ層 |
| 506 | にぶい黄橙色 | A | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 507 | 灰色 | A | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 508 | 浅黄橙色 | B | b | 1A区第Ⅳ層 |
| 509 | 灰色 | A | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 510 | 灰色 | A | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 511 | オリーブ灰色 | A | a | 第Ⅱ・Ⅲ層 |
| 512 | 灰黄褐色 | A | a | 1A区第Ⅳ層 |
| 513 | にぶい黄橙色 | D | d | 4B区第Ⅳ層 |
| 514 | にぶい黄橙色 | D | c | 4B区第Ⅳ層 |
| 515 | にぶい黄橙色 | B | b | SD301 |
| 516 | 浅黄橙色 | C | c | 4B区第Ⅳ層 |
| 517 | にぶい黄橙色 | A | a | 4A区第Ⅳ層 |
| 518 | にぶい黄橙色 | B | b | SD401 |
| 519 | にぶい黄橙色 | A | a | 4B区第Ⅳ層 |
| 520 | 浅黄色 | B | a | 4B区第Ⅳ層 |
| 521 | にぶい黄橙色 | C | b | 2B区第Ⅳ層 |
| 522 | 灰黄褐色 | C | b | 2B区第Ⅳ層 |
| 523 | 浅黄橙色 | C | c | 1A区第Ⅳ層 |
| 524 | にぶい橙色 | C | b | 2A区第Ⅳ層上面表掘り溝 |
| 525 | にぶい橙色 | C | c | 1B区第Ⅳ層 |

| 番号 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・層位 |
|---|---|---|---|---|
| 526 | にぶい黄橙色 | A | a | SD401 |
| 527 | にぶい橙色 | A | a | 柱穴2 |
| 528 | にぶい黄橙色 | A | a | 柱穴2 |
| 529 | にぶい黄橙色 | A | a | 柱穴2 |
| 530 | にぶい黄橙色 | B | a | 柱穴2 |
| 531 | にぶい黄色 | A | a | SD401 |
| 532 | 浅黄褐色 | A | a | SD401上部 |
| 533 | 浅黄褐色 | A | a | SD401上部 |
| 534 | にぶい橙色 | A | b | SD401上部 |
| 535 | 橙色 | B | a | SD401 |
| 536 | 明赤色 | B | a | SD401 |
| 537 | にぶい橙色 | A | a | SD401上部 |
| 538 | 浅黄橙色 | A | a | SD401 |

出土土器類観察表

凡例　胎土　A：密・精良
B：やや密
C：やや粗
D：粗
焼成　a：良好
b：やや良好
c：やや軟
d：軟

（7）石器類

本調査地からはサヌカイト等を加工した打製石器と玄武岩等を加工した磨製石器とが出土しておりその総数はコンテナ約1箱分になる。一遺跡の石器としては豊富な出土量が認められるが、そのうちの数点を抽出し本遺跡における石器組成を概観できるよう打製・磨製に分けて以下にまとめた。個々の帰属時期に関しては出土層位・形態的特徴により推測可能なものにおいてのみ報文中で言及したが、概ね当遺跡出土の縄文土器の帰属時期に重なるものと考えられ、縄文後期前半期の範疇で捉えることが可能であろう。なお、石材、各部の計測値については観察表を参照されたい。

磨製石器（1～20）

1は本調査地で唯一出土した石包丁である。両面穿孔によって穿たれた2孔には使用による紐ズレ痕が上方に向かって看取され、左方の孔付近には未貫の孔が認められる。片面のみ刃部を有し、弥生中期頃の帰属が考えられる。

石斧（2～9）には大小様々な形態のバリエーションが存在する。横断面は隅長丸方形のものが大半だが9は中央がやや凹む隅丸逆台形を呈し、尖り気味の刃部を有す。

10・11はほぼ全面にかけて敲打痕を残すハンマーで、12・13は中央に敲打による凹みを有した叩

石である。

両面とも研磨面を呈する石皿（14）は表面に水銀朱の付着が認められる。

15～17は石錘で上下両端に刻み目を施している。

18は石刀である。刺部は縦方向の丁寧な研磨調整が施され先端は未調整である。19・20の磨石では前者が上面および底面を、後者は全面にわたって研磨使用している。（八重樫）

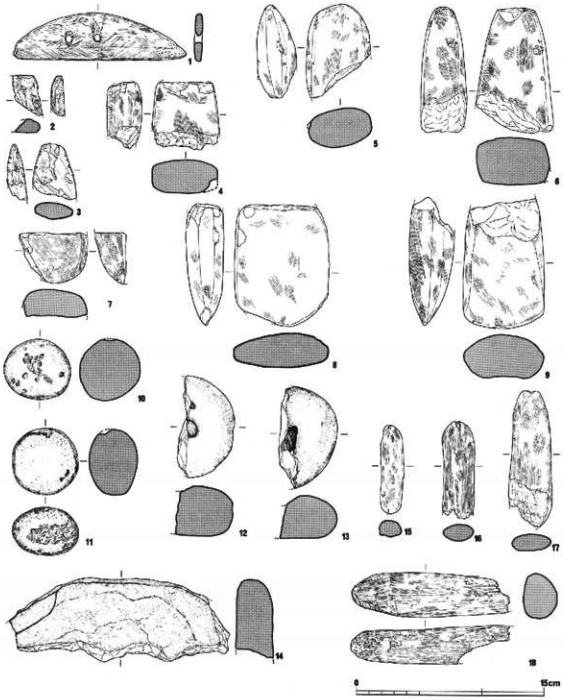



図39　出土遺物実測図24（石器類・S＝1／3）

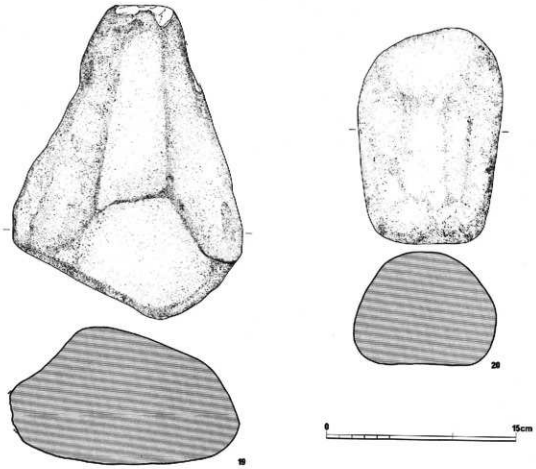



図40　出土遺物実測図25（石器類・S＝1／3）

打製石器（21～37）

21～28の石鏃は凹基無茎のものと凸基有茎のものとが存在し、前者は後者に比べて器壁の薄さが目立つ。23は細密な刃部調整を施さず粗い押圧剝離により成形され22とともに下側縁が丸く張り出すハート型を呈する。25はやや粗い刃部調整を施し下側縁に角をもつ五角形型石鏃である。27・28は器面に狭長な平行押圧剝離を施す凸基有茎の石鏃である。なお25～28は弥生時代に比定される。

29・30・32は縦型石匙である。刃部の大部分を欠損する29はつまみ部に強い括れをもち、わずかに残る刃部には細密な刃部調整が認められる。32は自然面と素材面を大きく残し横断面は厚く台形に近い形を呈する。

横型石匙の31はつまみ部を新しく欠損し、刃部が緩やかに湾曲する。33は石小刀または削器の基部と考えられるもので上端に刃部らしき細部調整が認められる。帰属時期は定かではないが形態的に弥生時代に比定できよう。

34～37は著しく風化の進んだ削器である。34・36は芝山産のカンラン石安山岩を、35・37はサヌカイトを素材としている。これらの帰属時期は不明であるが、器面の風化度が著しく進んだ点から他の石器類より時期的に遡る一群と考えられるものである。（八重樫）

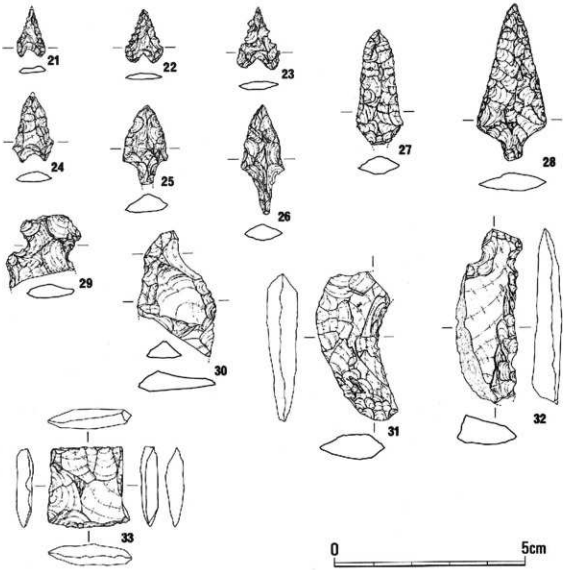



図41　出土遺物実測図26（石器類・S＝1／1）

硬玉製大珠（38）

38は硬玉（ヒスイ）製の大珠であるが、大きさ的には首飾りとして使用されたものかも知れない。原材料の部分的な質の違いにより、表面とした片方の面にはあざやかな緑色の部分が多くを占めるが、裏面としたもう一方の面ではこげ茶色、やや黄色味を帯びた乳白色を呈して見た目にも表裏の違いが明瞭であると言える。台形状の形態をもち、側面には一方向からの穿孔による貫通孔が穿たれている。なお、石材となるヒスイは新潟県糸魚川付近より搬入されたものと考えられ、前述の縄文土器類にみられる広範囲な地域間交流の結果としてもたらされたものであろう。帰属時期については、埋甕遺構に近い出土地点とその共伴が考えられる状況により当遺跡の主体を成す縄文後期前葉の範疇で捉えることができよう。（青木）

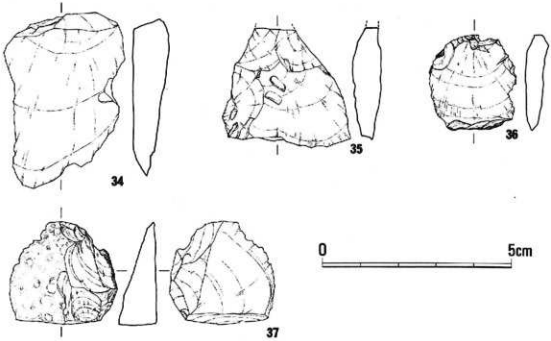



図42　出土遺物実測図27（石器類・S＝1／1）

図43　出土遺物実測図28
（硬玉製大珠・S＝1／1）

## Ⅳ　まとめ

別所ツルベ遺跡は今回の調査の契機となった開発行為に伴う事前確認調査により新たに発見された複合集落遺跡である。遺跡の主体となるのは縄文後期前葉の集落域であったがそれ以降の時期についても弥生中期前半から後期末頃、古墳前期初頭以降は奈良・平安期に至るまでの遺構、遺物の存在を確認している。ここではそれら各時期の遺構、遺物についての概観を再度列記し、まとめとしておくことにする。

（1）遺構群の変遷

第1次調査区では縄文後期の集落域のほぼ全域に近い範囲を調査することができた。その結果住居、埋甕、その他の土坑等の遺構を径25m程度の範囲で多数検出することができ、出土土器類の時期幅よりほぼ縄文後期前葉の限定される時期に帰属が求められるものであった。次に、縄文

晩期では突帯文系の長原式の土器が調査区東側の流路より出土し、同様に弥生前期の土器についても出土することから、その時期幅に該当する集落が調査区北東の方向に近在する可能性を示している。

弥生中期には、中期前半頃を中心に調査区中央を斜行する溝ＳＤ402を集落域の東限区画の溝として、その西側から北西方向の微高地上に集落の展開が予想される在り方を見せているが、中

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ(cm) | 重量(g) | 色調 | 石材 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 石包丁 | 3.8 | 13.7 | 0.65 | 58.0 | 緑灰色 | 玄武岩質凝灰岩質片岩 |
| 2 | 石斧 | (3.2) | (2.4) | (1.05) | 8.5 | 明緑灰色 | 玄武岩質凝灰岩 |
| 3 | 石斧 | 4.9 | 3.45 | (10.3) | 30.0 | 明褐灰色 | 玄武岩質凝灰岩 |
| 4 | 石斧 | (5.3) | 5.35 | (2.65) | 139.0 | 青灰色 | 蛇紋岩 |
| 5 | 石斧 | (7.5) | 5.2 | (3.05) | 158.5 | 暗青灰色 | 蛇紋岩 |
| 6 | 石斧 | (10.0) | (6.2) | (3.6) | 343.0 | 灰白色 | 輝石安山岩質凝灰岩 |
| 7 | 石斧 | (4.05) | (5.5) | (2.15) | 67.0 | 灰色 | 玄武岩質凝灰岩 |
| 8 | 石斧 | (9.7) | 7.55 | (2.85) | 341.0 | 明オリーブ灰色 | 玄武岩質凝灰岩 |
| 9 | 石斧 | (10.3) | 6.45 | (3.5) | 334.0 | 灰色 | 玄武岩 |
| 10 | 叩石 | 4.9 | 5.35 | 4.85 | 167.0 | 灰白色 | 流紋岩質溶結凝灰岩 |
| 11 | 叩石 | 5.25 | 5.2 | 2.8 | 132.0 | 灰色 | チャート |
| 12 | 叩石 | (4.5) | (8.2) | (4.1) | 210.0 | 灰白色 | カンラン石 |
| 13 | 叩石 | (4.7) | (8.1) | (3.4) | 163.0 | にぶい橙色 | 流紋石 |
| 14 | 石皿 | (17.5) | (6.7) | (3.2) | 631.0 | 黄灰色 | ハンレイ岩 |
| 15 | 石錘 | 7.1 | 2.0 | (1.25) | 27.0 | 暗青灰色 | 泥質片岩 |
| 16 | 石錘 | (7.8) | (2.5) | (1.6) | 44.0 | 灰色 | 泥質絹雲母片岩 |
| 17 | 石錘 | (11.9) | 3.4 | (1.35) | 74.5 | 青灰色 | 泥質片岩 |
| 18 | 石刀 | 12.6 | (3.1) | (2.7) | 169.0 | 灰色 | 泥質点紋片岩 |
| 19 | 石皿 | 18.2 | 25.0 | 10.9 | 5500 | 灰色 | ハンレイ岩 |
| 20 | 擦石 | 11.4 | 17.5 | 8.6 | 3000 | 灰白色 | |
| 21 | 石鏃 | (1.8) | 1.1 | 0.35 | 約1.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 22 | 石鏃 | 2.1 | 1.5 | 0.28 | 約1.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 23 | 石鏃 | (1.9) | 1.7 | 0.33 | 約1.0 | 青灰色 | サヌカイト |
| 24 | 石鏃 | (2.1) | 1.6 | 0.4 | 約1.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 25 | 石鏃 | (3.1) | 1.75 | 0.7 | 約3.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 26 | 石鏃 | 4.35 | 1.7 | 0.6 | 約2.5 | 灰色 | サヌカイト |
| 27 | 石鏃 | (4.55) | 1.8 | 0.7 | 約5.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 28 | 石鏃 | 6.2 | 2.75 | 0.72 | 約8.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 29 | 石匙 | (2.85) | (2.9) | 0.65 | 約4.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 30 | 石匙 | (5.0) | (3.1) | 0.81 | 約9.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 31 | 石匙 | (5.8) | (2.9) | 1.13 | 約19.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 32 | 石匙 | (6.9) | (2.7) | 1.15 | 約22.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 33 | 削器 | 3.2 | 3.2 | 0.7 | 約8.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 34 | 剥片 | 6.9 | 4.7 | 1.4 | 約50.0 | 灰白色 | カンラン石安山岩 |
| 35 | 剥片 | (4.7) | 5.1 | 1.1 | 約27.0 | 灰白色 | カンラン石安山岩 |
| 36 | 楔形石器 | 3.7 | 3.4 | 0.8 | 約13.0 | 灰色 | サヌカイト |
| 37 | 剥片 | 4.0 | 4.2 | 1.5 | 約21.0 | 灰白色 | サヌカイト |
| 38 | 大珠 | 2.6 | 2.1 | 1.1 | 約7.0 | 明緑色 | 翡翠 |

出土石器類　観察表

期後半から後期初頭、前半までの遺物の出土が認められないため、極めて短期間に限定された環濠集落となろう。また後期には前述の溝（環濠）埋没後も同じ範囲に集落が重複していることがわかる。

弥生後期末から古墳前期初頭にかけては、遺物包含層中より広範囲に当該期土器の出土が見られるが、東方の低地部周辺に多く認められるため集落はさらに東寄りに存在が考えられよう。なお、古墳中、後期以降についてはほとんどが西方の微高地上にあり、国道169号線を挟んで北西方向への展開が予想されることから今後も新規の開発行為の度に留意する必要がある。

（2）出土遺物の特質について

特筆すべき点は多量に出土した縄文土器に指摘することができる。当該土器群は少量の中期末～後期初頭の型式に該当する土器を含むものの主体を成すのは後期前葉の北白川上層式を中心とした時期のもので縁帯文系土器盛行期の有効な資料と成り得る土器群である。これらの中には多くの外来系土器も存在し、関東の掘之内系の他にも南東北の網取式、山陰の布勢式、北部九州の鐘崎式等が散見され奈良盆地東部域における当該期土器様相の一端を示すものとして評価できよう。当遺跡の土器様相は、在地産の土器と外来の搬入土器、そして外来系土器の影響下に在地化したものと大きく３つに大別することができるが、そのうち在地化して定着した外来影響を受けた土器が多くを占める点が注目される。その点については出土したヒスイ製品のように遠方よりもたらされた遺物の在り方にもその要因を想起することができ、当遺跡の立地が奈良盆地の東縁の一地域となる立地条件からも、周辺地域を介在して活発な交流が認められた地域と特定できる要素と言える。つまり、当遺跡が当該期における拠点的集落あるいは地域として考えられる材料でもある。この点については当該期前後の集落、土器等の資料の増加を待って判断せねばならないが、以上のように別所ツルベ遺跡については、その土器類の実相から一応ではあるが奈良盆地東部における拠点と成り得る集落であることを強調しておきたい。（青木・八重樫）

**謝　辞**

別所ツルベ遺跡の調査では多量の縄文後期土器を含む良好な遺物包含層と時期幅の限定される遺構群を確認することができた。しかしながら遺構についてはは ともかく、その出土土器の観察から時間的位置付けとその意義、当該期土器研究の現状把握に至るまでに多大な時間を費やすこととなった。その間に多くのご教示を頂いた研究者各氏に対してこの場を借りて感謝の意を表しておきたい。特に泉拓良氏には図示した土器片の一点ずつについての詳しい説明を受け、今後も筆者らが当該期資料に直面したときに対応できるようなまでの自信を与えて頂いた。また、松田真一氏には遺跡立地や比較材料となる遺跡に関して教わった点が多かった。報文中にそのすべてを反映することはできなかったが、今後も当遺跡の調査を通じて各氏のご教示よりもたらされた知識を糧に努力を重ねてゆきたいと思う。（青木・八重樫・松本）

## 参考文献


千葉　豊　「縁帯文系土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」
『史林』第72巻第6号　1989

千葉　豊　「西日本縄文後期土器の二三の問題
－瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題－」
『古代吉備』第14集　1992

泉　拓良　「北白川上層式土器の細分
－京都大学教養部構内AO24区出土器の縄文土を中心に－」
『京都大学構内遺跡調査研究年報』　1979

阿部芳郎　「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態」『駿台史学』第71号　1987

岩崎二郎　「仏並遺跡71－ODの縄文土器」
「研究紀要1」（財）大阪府埋蔵文化財協会　1988

金原正明　「天理参考館蔵天理遺跡出土後期初頭縄文土器資料について」
『天理参考館報』第2号　1988

高槻市教育委員会　『芥川遺跡発掘調査報告書』　1995

滋賀県教育委員会他　「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」
『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅵ－3　1979

山添村教育委員会　『大川瀬跡』　1989

大川清・鈴木公雄・工楽善通編　『日本土器事典』　1997

澄田正一・大参義一・岩野見司　新編一宮市史資料編一 縄文時代　1969

写真6　SD402北半検出状況（南西から）

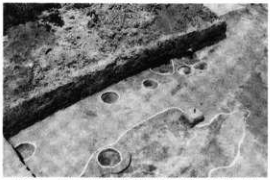


写真8　中央調査区西半遺構検出状況（南東から）

写真7　中央調査区西半遺構検出状況（北東から）

# 2．宮西遺跡－別所町

## Ⅰ　はじめに

天理教教会本部から天理市教育委員会へ、天理市別所町402－１ほかに所在する遺跡の発掘届書が提出された。当該地は遺跡地図では鐘子塚古墳が隣接し、また山辺御県座神社の南側に当たることから、遺跡の所在することが十分に予想された。

また、天理教教会本部からの発掘依頼を受けて、本市教育委員会において遺跡の有無を確認するための試掘調査を平成７年２月９日から15日にかけて実施した。

当該地は９枚の水田で高低差は３ｍあるところから、各水田ごとに調査トレンチを設定した。そして合計12ヶ所、面積約1500㎡の調査を実施した。

## Ⅱ　調査の内容

**第１トレンチ**　山辺御県座神社の前面の水田である。長さ約54mのトレンチと補助トレンチを設定した。この結果土坑１、柱穴２、溝２ヶ所を検出し、トレンチ内全面に遺構の存在が確認された。

時期は古墳時代から奈良時代まで含む。

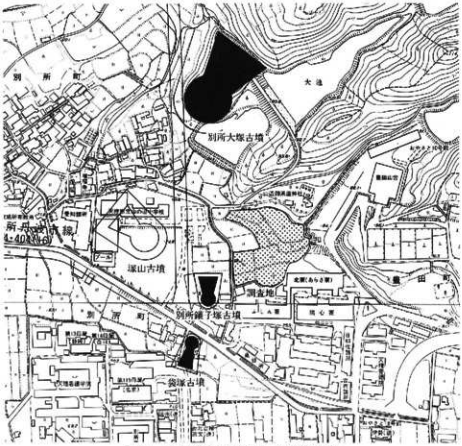



図44　宮西遺跡調査地と古墳分布図

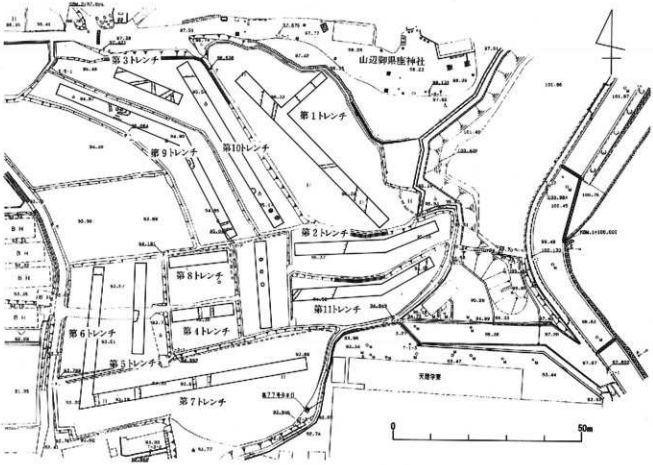



図45　宮西遺跡トレンチ配置図

**第2トレンチ**　長さ約40mのトレンチを設定した。ここでは遺構、遺物は検出されなかった。

**第3トレンチ**　長さ約23mのトレンチを設定した。中央部で方形の柱穴が3ヶ所検出された。各々2m間隔で並んでいる。

**第4トレンチ**　長さ約16mのトレンチを設定した。中央部で南北方向の幅4mの溝を検出した。古墳時代のものである。

**第5トレンチ**　長さ約26mのトレンチを南北方向に設定した。中央部付近で不整形の大型土坑を検出した。

**第6トレンチ**　調査地の西端に長さ約40mで南北方向に設定した。北側から多くの埴輪片が出土するため、ここでは遺物の保護を図る目的で余り深く掘削をしていない。このため遺構については不明な点が少なくないが、古墳に関連するものがあることは明らかである。

**第7トレンチ**　東西方向に長さ約60mのトレンチを設定した。ここでも古墳に関連する溝1（幅13mで埴輪を多く含む）と中央部付近で幅4mの溝を検出した。この溝は第4トレンチの溝につながるものと考えられる。

**第8トレンチ**　第4トレンチの北側に設定下。直径25cmの柱穴2ヶ所を検出した。

**第9トレンチ**　長さ約60cmのトレンチを設定した。そして溝3、土坑1、柱穴4を検出した。南端の溝は幅1.5mである。またこのトレンチでは遺構は西側に集中する。時期は古墳時代である。また中央部付近では埴輪片が多く出土したが、遺構は削平を受けているようである。

**第10トレンチ**　長さ約50mのトレンチを設定した。合計5ヶ所の柱穴を検出した。遺構の在り方は散在している。

このトレンチに隣接して第12トレンチを設定した。ここでは4本の溝を検出した。それぞれ幅は30～80cmあり、奈良時代の瓦と須恵器、土師器を多く含んでいる。

**第11トレンチ**　長さ約38mのトレンチを設定した。ここでは西端と東端の2ヶ所で溝を検出した。東端の溝は幅3mあり、須恵器片を含む。

## Ⅲ　まとめ

以上が各トレンチで検出した遺構の概要である。この結果、ほとんどの水田において何らかの遺構が存在し、時期は古墳時代から奈良時代にかけて継続している。特に第1、9、10、12トレンチでは土坑や溝が集中することから、集落跡が本調査で検出されるものと考えられる。また第4、5、6、7、8トレンチを含む東西50m、南北40mの範囲では埋没古墳が存在しているものと考えられる。

このため、駐車場の造成については現状の地形を留めるようにし、その後の跡地利用については、充分な発掘調査が必要である。

# 3．馬口山古墳－兵庫町

## Ⅰ　はじめに

馬口山古墳は天理市兵庫町馬口山381他に所在する前方後円墳であり、大和古墳群の中にある古墳として注目されている。墳丘は南北に主軸を置き、その規模は約110mである。墳丘前方部東側から南側に池があるが、これは古墳の周濠の名残と考えられて、本来は全体に濠を廻らされていたものと推定されている。また近年古墳から埴輪が採集されたが、これは古墳時代初頭期に属する古い埴輪であることが明らかになった。このようなことから、当古墳は大和古墳群の中にあってもっとも初期に築造された古墳である可能性が指摘されている。

このような古墳を調査する契機となったのは、天理市土木課による文化財包蔵地における無届け工事が発端である。工事の内容は墳丘西側裾部の既設の道路敷き上に対して、この中央部にU

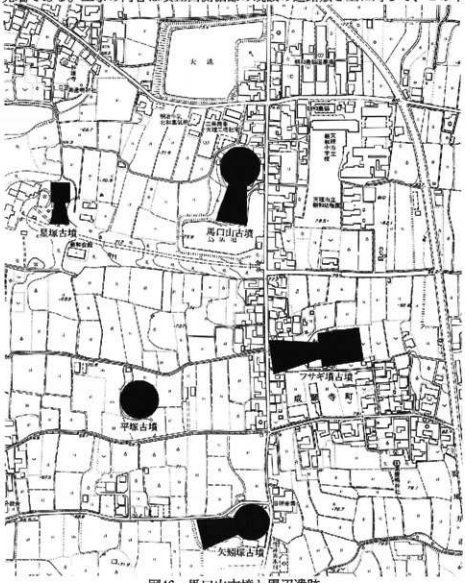



図46　馬口山古墳と周辺遺跡

字溝を伏せるという工事である。担当部署は新たな掘削を行わないために発掘届けを出す必要がないと判断したのである。このため発見時は、工事がついに終了していたというのが実情である。

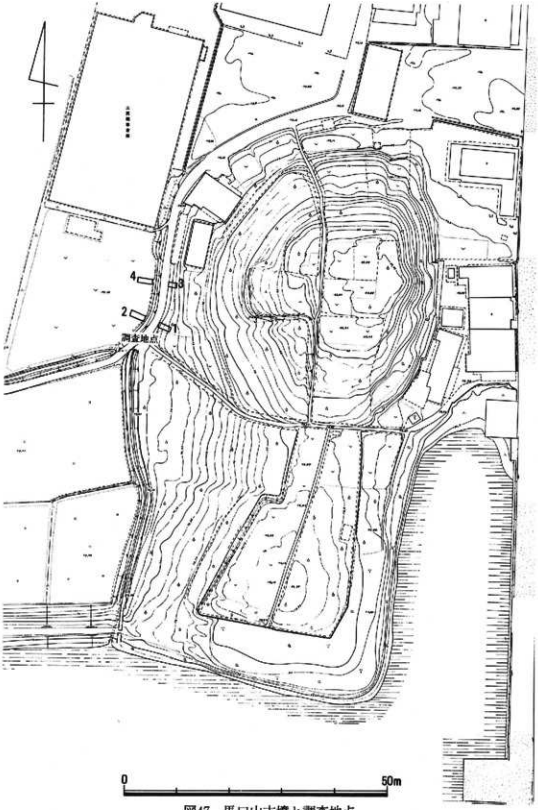



図47　馬口山古墳と調査地点

しかしこのことは工事の内容の如何に関わらず、周知の遺跡内での土木工事であり、担当課には文化財保護法上の発掘届けについて再指導と協議を行った。またこの間、奈良県教育委員会文化財保存課の指導のもと、土木工事により引き起こされた、文化財への影響を調査する目的で発掘を実施することが決定された。調査は天理市教育委員会が担当として、現場での調査方法は、道路を挟んで東西にトレンチを設定し、工事の古墳へ及ぼされた影響を見ることと併せて、墳丘側では裾部の観察を行い、西側では周濠の有無の確認を行うという方法を採った。

調査トレンチは4ヶ所で、1ヶ所あたり長さ1.5～2m、幅1m程度の規模である。調査時期は平成7年3月28・29日の両日を費やした。

## II　調査の概要

**第1トレンチ**　工事区間の南側に当たり、道路を挟んで東の墳丘側のトレンチである。現状では道路沿いから墳丘裾部になるが、道路面から約80cmでやや堅く締まった灰黒色粘質土になる。

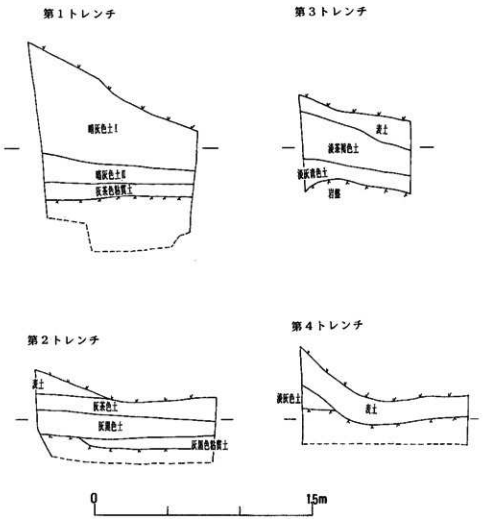



図48　馬口山古墳調査地土層図

この間は３層の堆積が認められるがどの層からも軟らかく畑の土のようである。そして全体から土師器皿や陶器片、瓦片が出土する。このためこの間の層は、近世ごろの整地土と判断されるのである。そして固く締まった４層は地山層と考えられ、約40cm深く堀り下げたが遺物は出土していない。また墳丘の裾部を示す盛り土はこのトレンチ内では確認できない。工事による影響もトレンチまで及んでいないことも判明した。

**第２トレンチ**　このトレンチは第１トレンチの道路を挟んだ西側に設定した調査区である。表土下約50cmで灰青色の微砂土となり地山面が検出され他。この間は、水平の堆積を示して周濠を示すような状況にはない。遺物も出土していない。

**第３トレンチ**　第１トレンチから北へ10mの距離を置いた調査区である。ここでは地表下約50cmで非常に堅固な茶褐色の岩盤を検出した。この間は、第１トレンチと同じような軟らかい土で出土する遺物も土師器片や陶器片などである。このため当調査地でも墳丘盛り土は見られない。

**第４トレンチ**　第３トレンチの道路を隔てた西側の調査区である。地表下約30cmで砂質土となり湧水が激しい状況である。このトレンチでも周濠の存在の可能性はないものと思われる。また第３、４トレンチでも工事の影響は認められない。

## Ⅲ　まとめ

以上４ヶ所に設定したトレンチのうち、墳丘側では古墳の裾部が検出されず、地山までの堆積土内からは新しい時代の遺物を含むところから、この堆積土は近年の整地土と判断される。そして墳丘裾部は調査区のさらに東側と考えられる。周濠についても明確な形では検出できない。

また工事による古墳への影響は、いずれのトレンチにおいても確認できない状況である。

いずれにせよ、このような状況下での発掘調査は遺憾なことであり、今回の調査は最小限の調査区の設定となったわけである。

# 4．前栽遺跡－前栽町

## Ⅰ　はじめに

天理市の中央部に所在する前栽遺跡は、近鉄天理線の前栽駅の南東側一帯に位置している。遺跡の範囲は比較的大きく天理市前栽町から平等坊町、杉本町、富堂町にかけて、東西500m、南北700mにおよび、遺跡の特徴としては遺跡範囲の北半部、前栽小学校の校内調査で見つかった縄文晩期の自然流路や、遺跡南半部で調査された古代から中世にかけての家宅跡など遺跡の性格はさまざまである。また所々で弥生土器も出土している。弥生時代における前栽遺跡の様子は不明であるが、前栽遺跡から西方500m西側には弥生時代の環濠集落として知られる平等坊・岩室遺跡が所在し、本遺跡との関わりが興味深い。

今回の発掘調査は、平成６年度事業として天理市教育委員会が天理市杉本町351-3番地において前栽公民館の建設を計画したため、その事前の文化財調査を実施したものである。

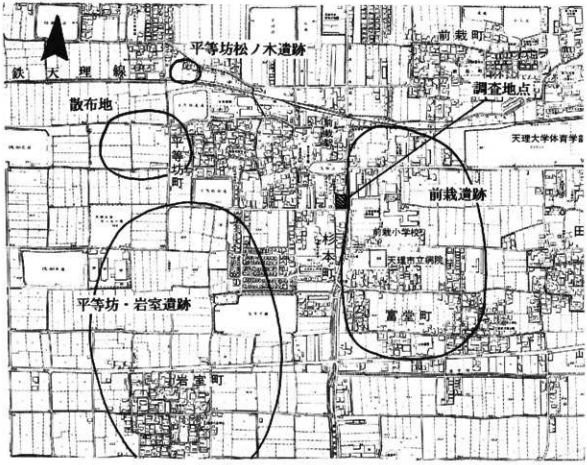



図49　周辺遺跡と調査地点の位置図（S＝1／10000）

## II　調査の概要

### a）試掘調査

図50　調査区基本土層（S＝1／160）

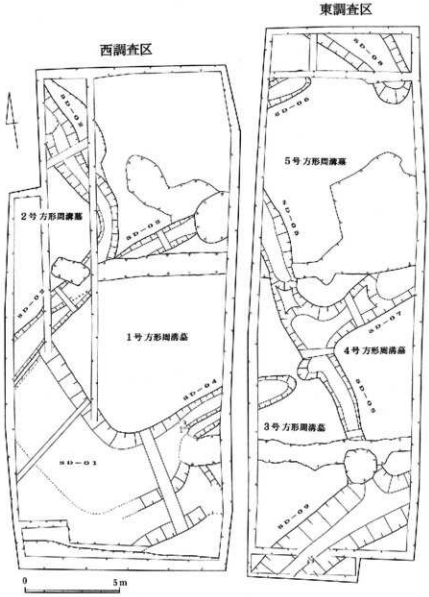



図50　調査区基本土層（S＝1／160）　図51　調査区平面図（S＝1／200）

調査地点は、いわゆる橋街道の西面に位置し、古代の幹線道路として知られる中ツ道に接しているため、当初は条里遺跡に関わる対応として試掘調査を試みたものである。試掘調査の直前まで旧二階堂村役場の木造建物が所在していたため、その建築によって建物基礎や庭池にともなう攪乱（図50—C）を受けていた。調査では、盛り土の上面から約30cmの深さで、旧耕作土に達し、旧耕作土の直下で弥生時代の包含層及び基盤層を検出した。弥生時代の遺構は旧耕土の直下にある暗茶色土層（図50—A）の上面から検出している。包含層は後述する方形周溝墓の周溝内に堆積した土層のことで、主に土器を含むものであったが、

遺物量は極めて少ないのが特徴である。暗茶色土の下方には１ｍ以上もの厚い砂礫層（図50―B）が幾層にも堆積を繰り返しており、弥生時代以前においては、調査地点が自然河川にあり、その沖積作用によって微高地を形成した地域と考えられる。

試掘では、幅２ｍほどのトレンチ掘りで調査したため、当初は遺構の性格が判然としなかったが、わずかながら弥生時代中期の土器片が出土したため、弥生時代の遺構が所在しているものと判断した。よって一部調査区の拡張をおこない遺構の確認を続けたところ、直交しあう溝の様子から方形周溝墓の可能性を指摘し、本調査を実施したものである。

b）方形周溝墓について

本調査は、南北34m、東西26m、延べ884m²におよぶ公民館の敷地全面を対象とし、調査区は土置き場の事情から東調査区と西調査区に二分して実施した。その結果、５基の方形周溝墓を検出し、その内訳は表１で示したのでそれを参照されたい。

方形周溝墓は、すでに後世の攪乱によって削平を受けていたが、かろうじて方形周溝墓を区画する周溝を検出することで、マウンドの所在を検出したものである。しかし存在したであろう方形周溝墓に関わる盛り土の痕跡はなく、方形周溝墓にともなう埋葬施設やその痕跡を確認するには至らなかった。方形周溝墓の規模を確認できたのは１号方形周溝墓と３号方形周溝墓だけで、他方形周溝墓は調査区外に墓域が延びていた。全体的な特徴としてわずかな範囲に５基もの方形周溝墓が集中し、マウンドが密集状態で、１・３・４・５号方形周溝墓は溝を共有関係でそれぞれ墓域を構成し、方形周溝墓を整然と区画している。またこれら４基の方形周溝墓の周溝には土橋状の渡りと思われる跡があり、１号方形周溝墓と３号方形周溝墓との間にあるＳＤ－04や１号

| | 周溝遺構 | | | | 規模（区画） | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 東溝 | 西溝 | 南溝 | 北溝 | 東西(m) | 南北(m) | 高さ(m) | |
| １号方形周溝墓 | SD－05 | SD－01 | SD－01<br>SD－04 | SD－03 | 12.8 | 8.6 | 0.35 | 東溝SD－05を５号方形周溝墓と共有<br>南溝SD－04を３号方形周溝墓と共有 |
| ２号方形周溝墓 | － | － | SD－02 | SD－02 | － | － | 0.24 | １号方形周溝墓の北西隅とSD－01、SD－04を切ってSD－02周溝を区画する。 |
| ３号方形周溝墓 | SD－05 | | SD－09 | SD－04 | 8.0 | 8.5 | 0.32 | 北溝SD－04を１号方形周溝墓と共有<br>東溝SD－05を４号方形周溝墓と共有 |
| ４号方形周溝墓 | － | SD－05 | SD－09 | SD－07 | － | 9.3 | 0.38 | 西溝SD－05を３号方形周溝墓と共有<br>北溝SD－07を５号方形周溝墓と共有 |
| ５号方形周溝墓 | SD－08 | SD－05 | SD－07 | SD－06 | － | 10.7 | 0.26 | 西溝SD－05を１号方形周溝墓と共有<br>南溝SD－07を４号方形周溝墓と共有 |

表１　前栽遺跡・方形周溝墓表

方形周溝墓と５号方形周溝墓との間を区画するＳＤ－05には溝の切れ目や溝底がその部分だけ浅く土橋状の盛り上がりがみられる。また調査区の西側で検出した２号方形周溝墓は、１号方形周溝墓を区画するＳＤ－01・03やマウンドの北西隅切って区画しており、１号方形周溝墓より遅れて周溝を区画していることがわかる。

c）出土遺物と出土状態

１号方形周溝墓の南溝（ＳＤ－04）から壺と甕が出土している。出土状態には特徴があり、(図52参照)、溝の方向に主軸を合わせ横並びに倒れた状態で出土している。発掘では当初供献土器と判断していたが、出土した壺と甕の口縁部がそれぞれ逆向きに整然と並んで出土したため、土器棺を周溝内部に埋葬していた可能性も考えられる。

土器の出土状況

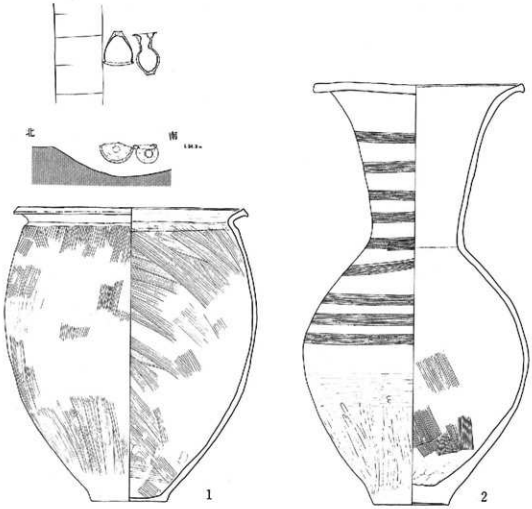
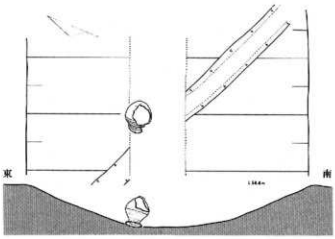



図52　１号方形周溝墓南溝（SD－04）出土土器
出土状況図（S＝１／40）
出土土器（S＝１／４）

出土した壺は（図52－２）、口径22.4cm、器高44.7cm、胴幅13.9cmのいわゆる広口長頸壺で、頸部から胴部上半にかけて９条の櫛描直線文を施文し、胴部中位にはヨコヘラミガキ、胴部下半から底部にかけてはタテヘラミガキで調整する。大和第Ⅲ－３様式の壺と思われる。甕は（図52－１）、口径25cm、器高31.1cm、胴幅26.8cmの口縁部をシャープなヨコナデ調整で仕上げた中型甕で、胴部外面には煮沸の痕跡が残る。




土器の出土状況

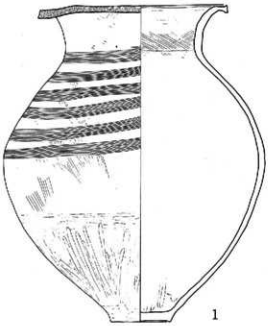



図53　３号方形周溝墓南溝（SD－09）出土の供献土器
出土状況図（S＝１／40）
出土土器（S＝１／４）

３号方形周溝墓の南溝（SD－09）から壺の完形品が１点出土している（図53参照）。

出土状況は、前述の壺・甕とは異なり、口縁部を下方に向けて落ち込んだ様子であった。また出土した位置も３号方形周溝墓の対岸側に寄って出土しており、この壺が３号方形周溝墓にともなう供献土器であるかどうか定かでない。壺（図52－１）の口径は20.2cm、器高33.6cm、胴幅27.8cmのいわゆる広口壺である。口縁端部に波状文、胴部上半に６条の櫛描直線文を施文し、胴部中位から下半にかけてヨコヘラミガキ、底部付近をタテヘラミガキで仕上げる。大和第Ⅲ－３様式の壺と思われる。

## Ⅲ　まとめ

前栽遺跡から弥生時代中期の方形周溝墓が見つかり、貴重な成果を得た。方形周溝墓を５基検出したが、いずれも盛り土は残っておらず埋葬施設の痕跡はなかった。２号周溝墓をはぶいて１・３～５号周溝墓は、区画溝を共有しあい渡り状の土橋が見られるなどこれらの方形周溝墓が一つの群を構成していたものと思われる。出土土器が極めて乏しく、それぞれの方形周溝墓に時期を判断するのは難しいが、出土した供献土器や土器棺と思われる壺、甕の特徴から大和第Ⅲ－３（畿内第３様式・新段階）頃の遺構と推測する。なお２号周溝墓だけが、時期的に下がるものと思われる。

ところで近年においては、奈良盆地で弥生時代の方形周溝墓遺跡が各所で発見されつつある。こうした弥生時代の墓域を形成した遺構の存在は、それに関わる集落遺跡との関係が注目され、弥生時代の研究に極めて興味深い所である。たとえば橿原市の土橋遺跡では　多数の方形周溝墓群が発見され、中曽司遺跡と土橋遺跡（方形周溝墓）との関係が求められつつある。今回、方形周溝墓が検出された前栽公民館から西方300mには、環濠集落で知られる平等坊・岩室遺跡が所在し、それにともなう墓域の一つである可能性が十分考えられる。

写真　　試掘調査の風景

# 平成７年度
(1995)